

道助法親王家五十首の伝本について 田中穰氏旧蔵典籍古文書所収「建保五十首」の翻刻と簡校

On the Manuscripts of the Fifty Waka Poems of Doujohshimouke: The Reprint and Simplified Comparison of the Fifty Waka Poems of
 Kenpo from the Tanaka Collection
 OOTA Katsuya

太田克也

はじめに

田中穰氏旧蔵典籍古文書（以下、田中本）のうちの「建保五十首」は、従来本格的に検討されることのなかった道助法親王家五十首（光台院五十首とも）の一伝本である。^①この五十首は道助法親王（一一九六—一二四九）が催した定数歌会で、建保六年（一二二八）頃企画され、承久二年（一二二〇）頃成立したとされる。いわゆる新古今時代の中心を担った藤原定家（一一六二—一二四二）を含めた二十二名の詠作を、後鳥羽院（一一八〇—一二三九）が合点を付して評価したものである。各歌人の詠風を検討するための材料となるだけでなく、後鳥羽院の歌観を考察する上でも有用な史料となっている。

道助法親王家五十首の伝本は収載される歌の配列によって二種類に大別される。一つは『新編国歌大観』（久保田淳、加藤睦担当）に収録されたことで広く知られている順序のもので、『新編国歌大観』^②底本の高松宮家伝来禁裏本（H一六〇〇—一七〇七）のほか穂久邇文庫蔵本^③などが

ある。もう一つは僧侶の歌を各題の中で配列の末尾へ移動したもので、古筆切の形でのみ残存する。^③伝藤原為家・同家隆筆と極められた鎌倉時代に遡る切が十五葉見つかっている。^④

ただ従来の研究では限られた数の伝本しか扱っておらず、基礎的研究としては不十分である。『新編国歌大観』が使用したのは計五本で、それ以外の伝本を組上に載せた論は見当たらない。『新編国歌大観』の解題に言及されるように、伝本は他にも多数存在するのだが、そもそも諸本全体を見渡した研究は未だに行われていないので、ここに諸本の精査を行う必要が生じている。

そこで本稿では、善本と見られる「建保五十首」を紹介し、諸本を整理した上で、該本の位置づけと意義について述べる。そうすることで、「建保五十首」が書写時期の古さ、合点の有する情報の正確さ及び本文の安定性の三点で、従来知られていた伝本よりも優位であると考えられ、今後の研究において活用すべき伝本であると主張するものである。

解題

書誌

既存の目録に著録されているが、私に書誌を示す。

建保五十首（日一七四三―一七） 文明十四年写 山科言国筆

包背装一冊。改装渋引表紙（27.0×21.1）。外題、左肩打曇題簽に墨書

「建保五十首 全」。料紙、楮紙。墨付、五十六丁。遊紙、前一丁。

字面高さ、約24.0（歌下の作者を含む）。每半葉十一行。和歌一行書。

内題、「五十首和歌」（作者目録題）。奥書、「以豊筑後守統秋本書写

畢于時／文明十四年五月十日／權中將（花押）。印記、巻頭「山科

藏書」（朱）。合点の長短を区別する。朱により部立頭の丸印、作者

目録の注記及び集付を付す。

本書は書写奥書によれば、文明十四年（一四八二）に山科言国（一四五二―一五〇三）が豊原統秋（一四五〇―一五二四）所持本を書写したものである。そして「山科藏書」の藏書印が捺されていることから、ある時期まで山科家に相伝されていたことも判明する。これらの点について以下に補足の説明を加えておく。

言国は山科家庶流の保宗男、本家の顯言の死により後継に迎えられると、同家が代々世襲した内藏頭となつて家督を嗣ぎ、廷臣としてよく仕えて従二位権中納言に至つた。日記に言国卿記がある。和歌活動に熱心であり、飛鳥井家を和歌と蹴鞠の師として励み、自筆の詠草が言国卿記に三冊分残る。言国は十代の頃から和歌や連歌に親しんでおり、文明年間には諸所の歌会に参加して詠進するだけでなく、自ら歌会を催したり、様々な歌書を書写したりした。文明七年には統秋と歌会で同座しており、この時点で既に交流のあったことが知られ、以後も度々共に出詠している。⁶⁾

言国が統秋から「建保五十首」を借り写したのは、彼の和歌活動にお

いて統秋との関わりを持ったことから生じた出来事であつたと理解できる。言国卿記が文明十四年記を欠くため、そのときの詳細な事情は判然としないが、文明年間の言国の旺盛な書写活動の一端を示すものとは言い得るであろう。

そうして書写された本書は山科家に伝わつたが、いつしか他の藏書とともに田中教忠の所蔵に帰した。「山科藏書」の印は江戸時代の山科家のものなので、そのときには確かに同家に保管されていたのだろう。田中本には同様の印記を捺す伝本のほか、山科家旧蔵の古文書や記録類が相当数あり、⁷⁾ 同家の藏書の一部がまとまつて移動したことがわかる。

意義

当該「建保五十首」の意義は、従来知られていた伝本よりも本文的に優位に立つと考えられるところにある。そのように考える理由には書写時期の古さ、合点の有する情報の正確さ及び本文の安定性の三つがある。そこで以下に現存諸本を簡易的に分類した上で、この三点における同書の優位性について、『新編国歌大観』が使用した伝本との比較を中心に述べる。

現存諸本とその分類

道助法親王家五十首の伝本は、古筆切を除き抄本や残欠本を含めると、現在二十六本を数える。このうち各所蔵機関または国文学研究資料館が公開する紙焼写真、マイクロフィルム、デジタル画像等によって、分類に必要な情報を確認し得た二十本を対象として分類を試みる。⁸⁾

まだ諸本全体を確認したわけではないので便宜的なものとなるが、ひとまず各本の体裁の違いによつて諸本を分ける。今回の分類に当たつては三つの基準を定めた。その基準と分類した結果を以下に示す。（☆は合点の長短を区別している伝本。各分類の中では所蔵者・所蔵機関の五十音順で並べ、群書類従は末尾に回した。）

基準

A…良宗考証の有無：「良宗案」で始まる後人の考証⁽⁹⁾を持つか否か。
B…出題者・加点者の有無：以下の二行を持つか否か。

建保六年^{御歳廿三} 出題 定家卿
御点 上皇^{後鳥羽院}歟

C…山家月題下注記の有無：道助法親王詠が続千載集では別の詠になっ
ていていることの注記があるか否か。

諸本分類（第一から第四の数字は分類のためのものであり、本文の優劣を意味しない。）

第一系統（Aあり）

国立歴史民俗博物館蔵高松宮家伝来禁裏本（H―六〇〇―七〇七）
※略称「高松」、『新編国歌大観』底本。

丹波篠山市立青山歴史村蔵本（二四〇）

肥前島原松平文庫蔵本（一三九―五五） ※略称「松平」。

穂久邇文庫蔵本 ※略称「穂久」、『新編国歌大観』対校本。

第二系統（Aなし、Bあり）

☆国立歴史民俗博物館蔵田中稜氏旧蔵典籍古文書所収本（H―七四三―
一一七） ※略称「田中」。

神宮文庫蔵本（三／六九五） ※ただしBは出題者のみで、

六三〇、六三一 番歌の順。あるいは第一系統か。

☆多和文庫蔵本（二八―二） ※略称「多和」。

天理大学附属天理図書館蔵本（九一―二四―イ九五）

天理大学附属天理図書館蔵点取和歌類聚所収本（九一―二九―イ

三）

☆名古屋大学附属図書館後藤文庫蔵本（九一―一四五―G）

樋口芳麻呂氏蔵点取和歌類聚所収本

松井明之氏蔵本 ※略称「松井」。

☆早稲田大学図書館蔵本（へ〇四・〇八一―三七）

群書類従巻第一七七和歌部三十二所収本 ※略称「群書」、『新編国
歌大観』対校本。

第三系統（Aなし、Bなし、Cあり）

☆京都大学附属図書館中院文庫蔵本（中院／VI／八四）

宮内庁書陵部蔵本（五〇一・八三四） ※略称「宮書」、『新編国歌大
観』対校本。

国立公文書館内閣文庫蔵昌平坂学問所旧蔵本（二〇一・二七三）

※『新校群書類従』対校本。

第四系統（Aなし、Bなし、Cなし）

国立公文書館内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本（二〇一・二六八）

神宮文庫蔵本（三／七八六）

丹波篠山市立青山歴史村蔵本（二四五）

諸本はAの有無により第一系統と第二―第四系統の二つに大きく分か

れる。ここで二分される伝本は、それぞれ他の点でも共通の特徴を有し

ている。第一系統の伝本はいずれも新編国歌大観番号の六三〇、六三一

番歌がこの順番で出てくるほか、出題者・加点者の前に

御詠 道助法親王^{俗名長仁 仁和寺 御室第五宮号光台寺}

母同頼仁親王内大臣信清女

順徳院 紀号 法親王戊寅年

の二行を置く。さらにこちらの伝本には合点の長短を区別する本がな

い。（ただし「松平」は途中から区別がある。）一方第二―第四系統の伝

本は、六三一、六三〇番歌の順で歌があり、上記の二行を有することが

ない。

第二―第四系統の伝本は、BとCの有無によってさらに下位の分類が

できる。Bを持つ第二系統の伝本は総じてCを持たず（「多和」を除く）、

合点の長短を区別する本が複数存するところに特徴がある。

以上が諸本を分類したものが、元々の形を残している伝本群を特定

表1 作者目録の合点数と各本の実際の合点数
〔長〕は長合点の数

	目録	田中		高松	穂久	宮書	久保
		全体	長				
道助	22	22	9	19	19	23	20
公経	9	9	1	8	9	8	8
実氏	7	7	1	7	7	7	6
定家	27	27	14	27	28	26	24
雅経	19	19	13	20	18	17	18
家衡	1	2	0	0	1	1	1
家隆	28	28	19	28	26	27	25
保季	3	4	0	3	3	3	2
知家	2	2	1	2	2	1	2
定範	7	7	2	7	7	6	7
範宗	4	4	1	4	4	4	4
信実	2	2	0	2	2	2	2
行能	1	1	0	1	1	1	1
幸清	11	11	9	10	10	9	11
覚寛	7	7	3	7	7	6	7
隆昭	16	14	5	13	13	11	14
経乗	5	5	1	4	4	4	4
家長	4	4	0	3	4	3	4
光経	3	3	0	3	3	3	3
孝継	8	8	3	8	8	8	7
秀能	28	27	12	25	23	21	26
俊禪	6	6	1	6	6	6	6
計	220	219	95	207	205	197	202

することはできない。後人の所為であることが確定的な良宗考証も室町時代に遡る可能性がある⁽¹⁰⁾ので、書き入れが多いからといって一概に後出だとは言えない。ただ後述するように合点の長短の別を保存している方が古態を保っていると考えられるので、第二系統に属する伝本が本来の形に近いと推定される。

書写時期

実見していない伝本がいくつかあるものの、「田中」が完本の中での最古写本であろう。既に書写時期の判定または推定がなされている「高松」、「穂久」、「宮書」及び「久保」はいずれも江戸時代の写本であり、その他の本も筆致から見て江戸時代より前には遡らないように思う。ただし唯一「松井」は覚道法親王（一五〇〇—一五二七）筆との極めがなされていて、真偽のほどは定かでないが、「田中」とともに室町時代の古写になる可能性がある。

合点

諸本は群書類従所収本を除き全て合点を有しており、合点の長短を区別するものとしないうちに分かれる。「新編国歌大観」が使用した伝本には合点の長短の別がなく、このことが知られていなかった。ところが諸本を見渡してみると、現在「田中」を含めて五本が合点の長短を区別して書写している。

諸本が巻末に有する後鳥羽院の勅書には「随_二歌浅深_一存_二点長短_一」とあるので、長短を区別して合点を付している方が本来の形であったと考えられる。「田中」に次いで古い可能性のある「松井」では区別していないものの、伝甘露寺親長筆の室町時代に遡る古筆切ははっきりと長短を書き分けているから、そう考えるべきであろう。後鳥羽院の歌観を考える際には、この長短の別も考慮に入れなければならないことになる。

合点の有無は伝本間かなり相違が見られるのだが、「田中」は『新編国歌大観』の底本及び校合本よりも合点をよく保存していると考えられる。なぜなら作者目録に記される歌人別の合点数と、実際に打たれた合点の数の一致率が他本よりも高いからである。表1には「田中」と『新編国歌大観』が使用した「高松」、「穂久」、「宮書」、「久保」の歌人別合点数を集計した。作者目録の合点数は「田中」を用い、「田中」のみ長合点の数も掲出した。これによれば「田中」は作者目録の歌人別合点数と一致する割合が最も高い。不一致の歌人数（灰色で塗りつぶした）は四であり、他本の二分の一から三分の一ほどである。さらに他本が全く作者目録と一致しない歌人で一致を見ていたり、作者目録と不一致であったりも最も目録の数に近かったりする例がある。加えて合点数の合計と作者目録の数との差が一であり、他本よりも正確である。

本文

「田中」の本文は既知の伝本と比べた限りでは最も安定している⁽¹⁴⁾。その理由は他本がしばしば親本由来の欠脱を有するところで「田中」には

そのような箇所がないことと、「田中」が概ね『新編国歌大観』の校訂後の本文に一致することである。この点についていくつかの実例を用いて説明する。

まず他本において脱落が空欄で示されているところで、「田中」にはそうした欠陥がない点を取り上げる。これに該当する箇所は「高松」が六、「穂久」が三、「宮書」が五、「群書」が二ある。その中から各本一例ずつを掲出する。(上から歌番号、「田中」の本文、異文とその伝本の順で示す。(ママ)は私意。)

139 枕急かす^本枕 かつ (高松)

172 永し通路^(ママ)なか^(ママ)通路 (群書)

352 猶も忍ひの^(ママ)を忍ひの (宮書)

636 追風しるく^(ママ)風しるく (穂久)

これらはいずれも親本の脱落をそのまま保存したものと考えられる。本文に脱落があると他の部分の信頼性も揺らいでくるから、底本にはできるだけ損傷のない本文が望ましい。その意味で本文にこうした損傷のない「田中」は優れていると評価できる。

次に『新編国歌大観』が校訂した箇所において、「田中」の本文が校訂後の本文に一致する点を取り上げる。『新編国歌大観』が底本の「高松」に校訂を加えた箇所は四十五ある。「田中」はそのうち四十一箇所で校訂後の本文に一致する。該当する例を二つだけ掲げる。(『新編国歌大観』(歌番号で示す)、「田中」、「高松」の順で本文を掲げる。その中で他本に「田中」との異同がある場合はそれも同時に示す。)

32…何事にはるをしるらんぐひすのゆきのふるすにおのれこそなけ
田…なに事に春をしるらん鶯の雪の古巢にをのれこそなけ

高… ゆきのゆるすに
群… 雪のふるすを

41…山ふかみなほ空さえてふるゆきに春もまれなるうぐひすのこゑ

田…山深み猶空さえてふる雪に春も稀なるうぐひすの声
高…山ふかき
穂… はるとまれなる

このように「高松」の本文だけでなく、他本の誤りも正すことができることがわかる。ここには挙がっていないが「宮書」に対しても

5…久堅のあまの岩戸のむかしよりあくればかすむ春は来にけり

田…久方のあまの岩戸のむかしより明れはかすむ春はきにけり

宮… あま岩戸の

の如く同様のことが言える。

とはいえ「田中」の本文に全く問題がないというわけではない。『新編国歌大観』の校訂箇所でも「高松」と同じ本文を持ち、他本によって訂正すべきものもある。また現段階での独自異文による誤りも散見する。従って今後「田中」を用いるとしても、これまでと同じく他本による校訂を経る必要があることには留意すべきである。

おわりに

本稿で紹介した「建保五十首」は、これまで知られていた道助法親王家五十首の伝本よりも優位に立つと考えられる。山科言国筆の室町時代写本という書写年代の古さ、合点の長短を区別するという新たな情報と合点数の正確性、そして損傷の少ない安定した本文がその理由となる。今後のさらなる諸本の精査を待つ必要があるものの、本書がこれからの研究において活用されるべきものであると考えられることを、今ここで強調しておきたい。

今回は「建保五十首」の紹介と意義を述べることに主眼を置いたため、伝本調査は途中経過の報告となった。とりわけ合点と本文については、従来利用されてきた伝本との相違を中心に述べるにとどまった。従って今後も調査を継続して、何らかの形で最終的な結論を提示したい。また

成立や内容についての言及ができなかったが、いくつか論点は出てきているので、それらの点についても稿を改めて論じたい。

付記 所蔵資料の調査・紹介を許可された国立歴史民俗博物館及び調査の過程でご高配を賜った関係者の皆様に篤く御礼申し上げます。なお本稿は基盤研究「聆涛閣集古帖」の総合資料学的研究（二〇一七～一九年度）に関連するものです。

註

- (1) 他にも同様に未検討のままとなっている伝本がある。例えば慈鎮和尚自歌合の〔南北朝期〕写「慈鎮大僧正御集」（日一七四三―四八二）や藤原兼実が主催した歌合である〔室町末期〕写「右大臣家歌合 治承三年十月十八日」（日一七四三―四四五）などである。この二点については「建保五十首」と同時に調査し得たので、別の機会に何らかの形で報告したい。
- (2) 日本古典文学会編『新撰六帖 御室五十首 光台院五十首』（日本古典文学影印叢刊十五、貴重本刊行会、一九八一。久保田淳担当）に影印を収める。
- (3) 田中登「光台院五十首における歌人排列の問題点―古筆切を手がかりに―」（『古筆切の国文学的研究』、風間書房、一九九七、初出一九九四）参照。
- (4) 前註3論文の集成の後、別府節子「自詠自筆の和歌資料を中心とした中世古筆資料」（『出光美術館研究紀要』十六、二〇一一）により新たに二葉が見出された。
- (5) 川瀬一馬編『田中教忠蔵書目録』（自家版、一九八二）、国立歴史民俗博物館資料目録四『田中稜氏旧蔵典籍古文書目録』〔国文学資料・聖教類編』（国立歴史民俗博物館、二〇〇五）。
- (6) 以上の言国の和歌活動については飯倉晴武「室町時代廷臣の和歌修業―山科言国 文明六〇十年の場合―」（伊地知鐵男編『中世文学 資料と論考』、笠間書院、一九七八）、井上宗雄「中世歌壇史の研究 室町前期〔改訂新版〕」（風間書房、一九八四）五三三―五三六頁を参照した。
- (7) 国立歴史民俗博物館資料目録一『田中稜氏旧蔵典籍古文書目録』〔古文書・記録類編』（国立歴史民俗博物館、二〇〇〇）、前註5書（国文学資料・聖教類編）参照。
- (8) 個人蔵本には現在の所在を確認できていないものがある。なおここで対象としなかった残りの伝本は以下の通り。
北野天満宮蔵本（六一―二七六・ケ三〇）
久保田淳氏蔵本 ※略称「久保」、『新編国歌大観』対校本。前註2書に書誌と合

点の紹介がある。

住吉大社御文庫蔵本（二三―一八）

東京都立中央図書館加賀文庫蔵本（加七〇六四） ※藤原定家詠のみの抄出本。あるいは拾遺愚草からの抄出か。

東洋大学附属図書館蔵本（九一・一四七・G―四）

立命館大学図書館蔵本（一八八） ※春部のみの残欠本。

- (9) この考証を記した「良宗」は、東山御文庫蔵古今和歌集（勅六三―一―一六）や顕昭の古今集注に見られる書き入れをした「良宗」と同一人物か。良宗は伝未詳だが、一条家周辺の人物（またはその隠名）とも推測されている。川上新一郎「六条藤家歌学の研究」汲古書院、一九九九、伊倉史人「東山御文庫蔵『古今和歌集』の「良宗」書人について」（『中世文学』四十八、二〇〇三）参照。東京大学史料編纂所蔵「一条家書籍目録」（RS四一〇〇―一〇五）には「光台院五十首」の記載があるので、こちらもある時期には一条家に伝来していたことがわかる。なお武井和人「中世古典学の書誌学的研究」（勉誠出版、一九九九）参照。
- (10) 前註9参照。
- (11) 徳川美術館蔵手鑑「水荃」のうち、徳川黎明會編『鳳凰台・水荃・集古帖』（徳川黎明會叢書古筆手鑑篇四、思文閣出版、一九八九）に影印を収める。
- (12) 作者目録が本来伝本に具備されるものであったという確証はないが、ここでは一応存したという前提で論を進める。なお作者目録の合点数には一部異同があるものの、諸本による極端な違いはないので、この数値は安定していると判断した。
- (13) 「久保」は実見していないため前註2書に拠った。また「群書」は合点がないので除いた。
- (14) 「久保」は実見していないため除いた。ただし大勢に影響はないと思う。

翻刻

凡例

- ・「建保五十首」の全文を翻刻した。翻刻の方法や用いる記号等は通行に倣ったが、特記事項は次の通りである。
- ・底本の体裁については、これを改めた箇所がある。空行・余白は必ずしも反映させなかった。そのため丁替りと丁数は省略に従った。
- ・漢字と仮名の別及び仮名遣いは底本のままとしたが、漢字の字体は概ね通行のものに改めた。ただし一部の漢字と末尾の勅書においては保存したところがある。

- ・合点は翻刻せずに後掲の表を作成した。合点の長短の区別が明確でないところは、他本を参照して長短の別を判断した。
- ・各歌には新編国歌大観番号を付した。本書は『新編国歌大観』底本と一部歌順が異なっているため、その部分は番号が正順となっていないが、誤植ではないので注意されたい。

(宋下同シ)
。題

春十二首

初春	雪中鶯	橋辺霞	行路梅
春月	岸柳	旅春雨	遠帰雁
山花	関花	庭花	河款冬
夏七首			
社卯花	早苗多	里郭公	岡時鳥
夜盧橘	籬瞿麦	江蛩	
秋十二首			
早秋	萩露	萩風	尋虫声
山家月	野径月	船中月	晓鹿

河霧 擣衣幽 夕紅葉 残菊匂

冬七首

朝時雨 竹霜 池水鳥 嶋千鳥
松雪 湖雪 惜歳暮

恋六首

寄雲恋 寄露恋 寄煙恋 寄草恋
寄鳥恋 寄枕恋

雜六首

晓述懷 閑中燈 山旅 海旅
野旅 寄松祝

五十首和歌

作者 同御点數
付之

御詠 廿二首

〔西園寺入道前太政大臣(宋其下同シ)
右大将公經 九首〕

春宮権大夫実氏 七首 民部卿藤原定家 廿七首

参議藤原雅経 十九首 正三位藤原家衡 一首

正三位藤原家隆 廿八首 從三位藤原保季 三首

從三位藤原知家 二首 法印権大僧都定範 七首

中宮亮藤原範宗 四首 中務権大輔藤原信実 二首

散位藤原行能 一首 法印権大僧都幸清 十一首

法 橋覚寛 七首 〔盛後法親王(後醍醐天皇)孫第一
已灌頂阿闍梨隆昭 十六首〕

僧 経乘 五首 但馬守源家長 四首

宮内少輔藤原光経 三首 藤原孝継 八首

河内守藤原秀能 廿八首 僧 俊禅 六首

。春

初春

- 1 春と、もにたちにけらしな朝霞きのふの山そ遠さかりぬる 御詠
2 立そむる霞の衣うすけれど春きてみゆる四方の山のは 公経
3 ふる雪はことしもわかす久方の空にしられぬ春やきぬらん 実氏
4 春の色とたのむまてやはななめつるいふはかりなる山の霞を 定家
5 久方のあまの岩戸のむかしより明れはかすむ春はきにけり 雅経
6 朝日影さしてそれとはなけれども空よりしるき春の色かな 家衡
7 吉野川氷のひまにとけにけりうちいつる浪の花の下ひも 家隆
8 あさみとり初しほかせの浪のうへに春さへこゆるす糸の松山 保季
9 春日野の雪の下草色にいて、跡もみとりに春はきにけり 知家
10 けさはまた山も霞に成やらていふはかりなる春の明ほの 定範
11 山のはのかすむ斗をみよしの、雪まの草も春やきぬらん 範宗
12 春立て峯の朝日のいてしより身にしみよはる山の下風 信実
13 山姫の霞の衣春たてはきえねとうすき峯の白雪 行能
14 朝霞遠やまもとに立民の里をもわかす春はきにけり 幸清
15 春の色のいたりいたらすおしなへて霞にけりな四方の山のは 覚寛
16 いつよりの春の色とてみよしの、草のはつかに雪まわくらん 隆昭
17 あさほらけ岡辺の松の霞めるは千世のはしめの春やきぬらん 経乗
18 白妙のみのしろ衣うちはらひ春ともわかす雪はふりつ、 家長
19 玉敷の都に春は立にけりあつまの方やまつかすむらん 光経
20 たちそむる霞の衣風をうすみなに棹姫の春いそくらむ 孝継
21 春くれは氷なかる、あなし川松原の雪やとけはしむらん 秀能
22 春たつとたれみよしりに限けむその山となき今朝の霞を 俊禪
- 雪中鶯
- 23 梅か枝にこそこのやと、ふ鶯の初音もさむくあは雪そふる
24 うちきえしたまらぬ雪の花のえに移にけりな鶯のこゑ 公経
25 春やとき草葉もみえぬ雪の中にむすほ、れたる鶯の声 実氏
26 松の葉は今も深雪の古郷に春あらはる、うくひすのこゑ 定家
- 27 春となく初音はかりそ鶯の羽かせをさむみ雪はふりつ、 雅経
28 春やときまた降雪を花とみてをのか古巢に鶯ぞなく 家衡
29 鶯の雪の花笠ぬひわひていつれを梅とぬれてなくらん 家隆
30 名残ふく嵐やさむき鶯のこゑする山に消ぬしら雪 保季
31 いまはとて春を急かす鶯のなけとも消ぬ山のしら雪 知家
32 なに事に春をしるらん鶯の雪の古巢にをのれこそなけ 定範
33 鶯のこゑする方を尋ればまたしら雪の溪のかよひ路 範宗
34 またさかぬ軒はの梅に鶯の木伝ひちらす春のあは雪 信実
35 雪ふかき溪の鶯をのれのみなけとも春としる人やなき 行能
36 ぬぬる夜のはかなき夢も鶯の鳴音にのこる雪の曙 幸清
37 鶯のこゑする方を尋ても若菜つむへき野への雪かは 覚寛
38 梅か枝にか、れる雪を花とみてやとありけりとさるる鶯 隆昭
39 谷の戸やまた春さむき雪まよりはね白妙にいつるうくひす 経乗
40 あは雪のあはれわか身はふり行と春あらたまる鶯のこゑ 家長
41 山深み猶空さえてふる雪に春も稀なるうくひすの声 光経
42 初音いまた雪につ、める鶯の涙吹とけ春の谷かせ 孝継
43 うちとくる涙もこほる雪の中にまたかきくもる鶯のこゑ 秀能
44 降雪をさそふ斗の花とやはにははぬ風に鶯ぞなく 俊禪
- 橋辺霞
- 45 跡たにも今はなからの橋はしらかすむあたりの春の夕暮
46 なかめても契くちせぬ春なれやこそも霞しまの、つきはし 公経
47 里人の世わたる音はたえもせず霞の間なる淀のつきはし 実氏
48 影たえて下行水も霞けりはまなの橋の春の夕暮 定家
49 しもとゆふかつらき山に春やくる霞と絶ぬ久米の岩橋 雅経
50 岩橋のと絶も見えず春くれは霞わたれるかつらきの山 家衡
51 行人を思ひそわたる東路や霞か、れるさの、ふなはし 家隆
52 き、わたる跡はなからの橋はしら名をは霞もうつまさりけり 保季

- 53 かつらきや神の心もやすらひに猶夜をこめて霞そら哉 知家
- 54 東路や風もなきたる朝ほらけ霞たなひくさの、舟橋 定範
- 55 山のはを霞の隙に見わたせは夕日にのこる峯のかけはし 範宗
- 56 橋柱たてるやいつく春の日のなからの谷は霞こめつ、 信実
- 57 明ぬれと猶やわたさむ春霞たなひく山のかつらきのはし 行能
- 58 よしさらは霞もはてよ今はた、世をうち橋の跡たにもなし 幸清
- 59 橋姫のまつらん方もへたつらし霞吹とけ宇治の川かせ 覚寛
- 60 岩はしの神は春とそ契らまし明るもみえず霞む山のは 隆昭
- 61 春たては霞の衣かさねてもこぬ夜はぬらんうちの橋姫 経乗
- 62 見わたせは霞の浪にうきしつみかつ水隠、せたの長はし 家長
- 63 白妙のはまなの橋も見えぬまで遠方こめて立霞哉 光経
- 64 絶にける久米路の橋の中空に霞そわたる春の曙 孝継
- 65 春くれは霞たなひく雲間よりたえくみゆる山の梯 秀能
- 66 とたえにし久米の岩橋今更に霞そわたす春の明ほの 俊禪
- 行路梅
- 67 道のへに行かたしたふ梅の花ありとやこ、に匂ふ衣手
- 68 にほひのみ道ゆきふりの梅の花それともみえず春の夜のやみ 公経
- 69 みちのへのかた岡山の梅の花立よるはかり春風そふく 実氏
- 70 玉鉦のゆくて斗を梅の花うたて匂ひの人したふらん 定家
- 71 分やらぬにほひは深き梅花かえの花の往來も道まよふかにやとこそしらねかやはかくる、 雅経
- 72 春風にゆく袖にほふ梅の花やとこそしらね香やは隠る、 家衡
- 73 たか袖の往来もわかし玉鉦のみちてにほへる梅の下かせ 家隆
- 74 行てこそ問まし里の梅か、をまつ吹送る春の山風 保季
- 75 みちのへのいつの人まに梅花うつるふ斗風の吹けん 知家
- 76 里はいてぬ覚ぬそてのうつりかを嵐にかこつ梅の下道 定範
- 77 梅の花にほふさかりはみちのへのしつのかきねも人にとはる、 範宗
- 78 ふまはおし花はゆくてに古郷のみかきかはらの梅の下陰 信実
- 79 春霞あさたつそてもかほれとや梅さく山に吹嵐かな 行能
- 80 玉鉦の道ゆきふりの梅の花消すは人の跡やとふらん 幸清
- 81 吹送る風をはたのむ道のへのゆくてにあかぬ梅の匂ひは 覚寛
- 82 くらふ山やみにもしるき梅か、に中く春は道まどひけり 隆昭
- 83 みちのへや老木の梅のいにしへにたかゆく袖か匂そめけん 経乗
- 84 人はいさ待もやすらむ梅の花行過かたき香に匂つ、 家長
- 85 道のへのかきねにさける梅花たか袖わかす匂ふ比哉 光経
- 86 みちのへの野中の梅の春風にたかなをさりの袖も残らす 孝継
- 87 わきもこかなれし袂にくらふ山やみにこゆれと梅のかそする 秀能
- 88 もろ人の行かふのへの春風に衣てわかす匂ふ梅かえ 俊禪
- 春月
- 89 白妙の花よりほかは雲もなし霞にかきる春の夜の月
- 90 花さかぬ枝にも影やたまるらん木のめも春の山のはの月 公経
- 91 山のはに花のか、みと見る月も塵のまかひに霞比哉 実氏
- 92 山のはも霞のほかの花のかに此ころふかきいさよひの月 定家
- 93 ときはなる松はみどりの色そへて一入霞む春の夜の月 雅経
- 94 大方の空にそ花の色をなす霞にかすむ春の夜の月 家衡
- 95 雲は猶四方の春風吹はらへ霞にゆるすおほる月夜そ 家隆
- 96 おほかたの春はおほろの山のはに今夜霞まぬ月をみる哉 保季
- 97 今日も猶花はつれなき木の本にをのれうつるふ夜半の月かけ 知家
- 98 かつらきやあくるは惜き山のはの月にか、れる花のうき雲 定範
- 99 あはれしる人やなからん霞夜の月と花とは春を忘す 範宗
- 100 立わたる山辺の霞深からてすむほとみゆる春の夜の月 信実
- 101 深ぬるか雲よりうへの影みえて霞にあまる春の夜の月 行能
- 102 独みて思ひつ、くる春の夜の月もはかなき身の行ゑかな 幸清
- 103 心ともおほるなるらん春の夜の月を霞にかこつへきかは 覚寛
- 104 さそはる、花の行末のおほ空に風よりくもる春の夜の月 隆昭

- 105 深ぬとて恨なれにし方そなき入山かすむ春のよの月 経乗
106 深き夜の月と花とのひかりゆへよそなるねやの春灯 家長
107 久方の空吹はらふ春風に霞かゝらぬ山のはの月 光経
108 大空はわきて霞まぬ春の夜のこゝろの宿の月影 孝継
109 春きてもまたうら若き初草のみしかき夜半に霞月かけ 秀能
110 庭もせに軒はの梅のさきしより霞まてうつる春のよの月 俊禪
岸柳
111 青柳のきしよりかくる糸ことにみたれて落る水の白浪
112 春風の立田の岸の柳かけなかれもやらぬ浪の下草 公経
113 なかめやる三室の岸の柳原霞のうへに春風そふく 実氏
114 遅く遅後とくいつれの色を契らん花待ころの岸の青柳 定家
115 最上川陰こそ同いな舟の、ほれはくたる岸の青柳 雅経
116 浅みとり岸の青柳うちはへて春きにけりと浪もよる也 家衡
117 初瀬川なひく玉藻は水隠て岸の柳に春風そふく 家隆
118 立田河岸の柳をこきませて浪の花にも春はみえけり 保季
119 たつた川下ゆく水は浅けれと影のみ深き岸の青柳 知家
120 風吹は河そひ柳底消て浪こそかけの霞なりけれ 定範
121 龍田川岸の柳は棹姫のうちたれかみやかけてほすらん 範宗
122 青柳のかみなみ川の春風に三室の岸をあらふ白浪 信実
123 川よとのさはかぬ水もさはきけり岸の柳や陰なひくらん 行能
124 岩まゆく川そひ柳玉ゆらもほしえぬ枝を春風そふく 幸清
125 君か世に四方の草木のなひくをもまつしらすは岸の青柳 覚寛
126 浪のうへに岸の柳をこきませて花の錦のおれはみたる、 隆昭
127 芳野川きしの青柳うちなひき浪にこほる、露のしら玉 経乘
128 龍田川三室の岸の古柳いかに残て春をきるらん 家長
129 神南備の三室のきしの柳かけみとりも深き水の春哉 光経
130 陰うつす岸の青柳うちなひき下行浪も春風そふく 孝継
- 131 神なみのみ室の岸の川柳かはらぬ浪も春めきにけり 秀能
132 うき草をねを絶て行河風にさそはればはてぬ岸の青柳 俊禪
旅春雨
133 花と見てけふやぬれなむ春雨に行と陰なき岸※の白雲
134 行くらし雨降すさむ春の日のなかくもみえぬ道の芝草 公経
135 都には若菜摘らんあつまちや昨日もけふも春雨そふる 実氏
136 旅枕小屋もかくれぬ蘆のはの程なき床に春雨そふる 定家
137 春雨の古郷人のかたみとて蓑代衣ほさすともきむ 雅経
138 都には木のも今は春の雨日数ふり行旅のそらかな 家衡
139 ゆくてにもまた結れぬ若草の枕急かす春雨そふる 家隆
140 分来つる道は木のも春雨の古郷深き跡のしら雲 保季
141 旅衣ぬれては袖にしられる霞にわかぬ春雨のそら 知家
142 春雨も晴行す糸を見わたせば遠山桜雲そつれなき 定範
143 若草新替の露の枕もふしわひぬ春雨そ、く武蔵野、原 範宗
144 霞行都のさかひよそにのみ猶山かくす春雨の雲 信実
145 昨日までまた冬枯に分し野も今日はみとりに春雨そふる 行能
146 きのお今日こえ行山の苔の上に夕日色ある春雨そふる 幸清
147 春雨も旅の日数もふるほとは野へのみとりの色とみえけり 覚寛
148 春雨のふる野のかりいほさ、をあらみ軒はともなくおつる玉水 隆昭
149 明日ゆかむ野原の草はもえぬらし旅ねの庵に春雨そふる 経乘
150 やともかなさの、渡のさのみやはぬれてもゆかむ春雨の空 家長
151 ふみまよふ山路の苔の色そこき我袖ほさぬ春雨の比 光経
152 旅衣ぬれて春雨けふふりぬあすや緑の野への初草 孝継
153 志経替すはしほれて出し春雨の古郷人も袖ぬらすらん 秀能
154 白妙の袖の別にぬれ初て猶ほしかたき春雨のそら 俊禪
遠帰雁
155 別なはよると鳴ても思ひ出よ幾山遠くかへるかりかね

- 156 みるま、に心ほそくも飛雁の雲に成行春の明ほの 公経
- 157 帰るさのさかひいつくに成ぬらん雲なき空に消る雁かね 実氏
- 158 幾霞行野、すゑはしら雲のたなひく空に帰る雁金 定家
- 159 霞行四方の木めもはるく、と花待山にかへるかりかね 雅経
- 160 雲かくれ霞をわけて帰雁かけたにみえぬ春の夜の月 家衡
- 161 霞たつ春の山辺の花の色を吹くる風に消るかりかね 家隆
- 162 天津空都をうとく飛雁のはたての雲に遠さかるこゑ 保季
- 163 我なからつらき別を鳴雁の名残の空は雲ものこらす 知家
- 164 雲に入るこゑも姿も消はて、面影はかり帰るかりかね 定範
- 165 今のはや霞める峯のしら雲にたえくみえてかへる雁かね 範宗
- 166 帰雁ほとは雲るにをくれぬるたのむの方やみえず成行 信実
- 167 かへるかり霞ていぬる山のはに面影のこるしの、めの月 行能
- 168 今とはとて山飛こえて行雁のひとつ雲るにのこる夕暮 幸清
- 169 帰雁みち行ふりの言つても忘る斗に遠さかりぬる 覚寛
- 170 かこつへき雲も霞もなかりけり碧の空に消る雁かね 隆昭
- 171 今はやいつくの里にきこゆらん霞ていぬる春のかりかね 経乘
- 172 春の日の永し通路あとしあれは霞のをちに帰雁かね 家長
- 173 帰雁霞める空に数消て山のあなたに遠さかりぬる 光経
- 174 わきてよも跡は霞も深からし雲ぬのかりそ遠さかるらん 孝継
- 175 鳴きわたる雲井のかりの帰山きてもとまらぬ名こそつらけれ 秀能
- 176 かへるかり遠さかり行山のはにのこる月さへ猶かすみつ、 俊禅
- 山花
- 177 梓弓おしても花とたのみつ、いるさの山にかゝるしら雲
- 178 桜さく山は霞にうつもれて碧の空にのこるしら雲 公経
- 179 ちる花をよしの、奥にみる人はいと、もよほす色やそふらん 実氏
- 180 足引の山桜戸を稀にあげて花こそあるし誰を待らむ 定家
- 181 あたなりといひはなすとも桜花たか名はた、し峯の春風 雅経
- 182 山桜をのれ幾世の春をへぬ花にふり行みよしの、里 家衡
- 183 山さくらおほふ斗のかひもなし霞の袖は花もたまらす 家隆
- 184 明わたる今はの月の山のはにうす花さくら色にうつろふ 保季
- 185 ものことにあらたまれとも春をへて花にそまかふ嶺の白雲 知家
- 186 嶺つ、きなかもかゝる山のはの雲のいつくか桜なるらん 定範
- 187 紅のうす花桜さきにけり峯のしら雲色そまかはぬ 範宗
- 188 山のはの桜た、よひ吹風にかけてあたなる雲の色哉 信実
- 189 みよしの、山の桜はうつろひてあれたる宿に人そ稀なる 行能
- 190 住かへて思し山の桜戸を猶此世とてふく嵐かな 幸清
- 191 昨日けふ山の朝けそ色かはるいさ打むれて花を尋ん 覚寛
- 192 花の色は春はかさなる芳野山真木立峯の雲そ少き 隆昭
- 193 芳野山夜のまに花はさきにけり今朝立まさる峯の白雲 経乘
- 194 よし野山ふるき枝折そあはれなる今年も春の花を尋て 家長
- 195 三輪の山春のかさしの桜花松原をわけて誰か折らん 光経
- 196 朝霞立田の峯の木の間より人伝ならぬ初さくら花 孝継
- 197 御芳野、遠山桜春ことに心もそらにかゝるしら雲 秀能
- 198 白雲に桜こきませみよしの、山も霞まぬ春の曙 俊禅
- 関花
- 199 逢坂や霞もしろく吹風にいつれを雲と花ぞ知ける
- 200 山桜花の戸さしを明そめて風もとまらぬ白川の関 公経
- 201 散すなよ逢坂山の山桜袖に嵐の又かへりこむ 実氏
- 202 桜花たか世の若木ふりはて、須磨の関屋の跡埋らん 定家
- 203 惜めとも花もとまらす不破の関山吹こゆる春の嵐に 雅経
- 204 風過ぬ関路なりせは山桜のとかに春の花は見てまし 家衡
- 205 逢坂や曙しるへき花の色にをのれ夜ふかき関の杉村 家隆
- 206 色みえぬ花の香のみや通ふらん雲にとちたる白川の関 保季
- 207 桜色の衣の関の春風にわすれかたみの花の香そする 知家

- 208 花をたにと、むる名をもと、めはや春はもちひぬ関の嵐に 定範
209 白川の関のしからみかけとめよ花をさそひて春ぞ暮行 範宗
210 乙羽山音にはたてぬ花なれや関の杉間にみゆるしら雲 信実
211 逢坂の関守すまぬ御代なれと花みて過る人やなからん 行能
212 世にふれはさそなの春に逢坂の花にけふは暮しつ 幸清
213 ちらぬまは見捨て過る人もあらし花に任せよ白川の関 覚寛
214 清見方桜吹おろす山風にしほひもしらぬ浪のせきもり 隆昭
215 問れける関のわら屋はむかしにてあるしのこれる逢坂の花 経乘
216 且こえてぬさも取あへす逢坂の花の白木綿関のまに 家長
217 心あてにそれかとそみる桜花霞の関の春のゆふくれ 光経
218 関の名も人たのめなる逢坂に花をさそひて過る春哉 孝継
219 ちる花のかけやはとまる逢坂の関の清水の名さへ恨めし 秀能
220 乙羽山関のいさめはなけれども散しく花そ道もゆるさぬ 俊禪
庭花
221 庭の面に是もや風の懸たらむ水より外の花のしら浪
222 ふめはおしふまては人を問かたみ風吹わけよ花の白雪 公経
223 とはれつる人のかたみもと、まらすふめと跡なき花のしら雪 実氏
224 跡絶て問れぬ庭の苔の色も忘る斗に花そちりしく 定家
225 雪とのみふるはならひの花なれとやとから庭の跡や絶らん 雅経
226 こぬ人をとへともまたし桜花ちりなは庭のふま、くもおし 家衡
227 今朝みれば梢の花はちりにけり風の下なる庭のしら雪 家隆
228 さひしさをとは、恨し春深み跡なき庭の花をわくとも 保季
229 年をへて花の白雪ふりにけりあはれ幾世のやとの春かせ 知家
230 散花に降りふ雨の庭たつみ玉さかにみる春のみそれを 定範
231 山里の軒はの桜吹風に鶯ならてとふ人もかな 範宗
232 梢には青葉ましらて散花のつもればあらぬ庭のさ、原 信実
233 とふ人のうつろひはてし庭の面は花に任てすむへかりけり 行能
- 234 雪とふる花はさへえぬ庭の面に梢をしらぬ風そ残れる 幸清
235 春きても問れぬ庭の桜花ちらぬさきより人そ恋しき 覚寛
236 きてみれば昨日も花に跡たえて雪の下なる庭の蓬生 隆昭
237 又とへよけふの桜に吹風の明日さへふるは庭のしら雪 経乘
238 庭もせに散行花の梢には残すくなき春のくれ哉 家長
239 おのつから問くる人もみる斗花ちる庭の朝きよめすな 光経
240 人心風も吹あへぬ古郷は跡なき庭の花そつれなき 孝継
241 あさてほす庭に吹まく色みれば風のやとりになる桜かな 秀能
242 散やらて待みる庭の桜花つもらぬさきをとほ、問なん 俊禪
- 河款冬
243 芳野川いはてうつろふ山吹も春の日数をしらせかほなる
244 散はつる山吹の瀬に行春の花に棹さすうちの川長 公経
245 かさしおる八十うち人の麻衣ぬれてこ嶋の山吹の花 実氏
246 山吹の花にせかる、思ひ川なみの千入はしたに染つ、 定家
247 款冬のゐての里人ぬしやたれ花はこたへす春の川浪 雅経
248 くちなしにゐての川浪うちいて、みつともいはし花のさかりは 家衡
249 石はしる瀧なき川もかひそなきおれはこほる、山吹の花 家隆
250 散ぬるか水上しらぬ山吹の色になかる、ゐての川なみ 保季
251 吉野川おられぬ水に袖ぬれぬ浪にうつろふ岸の山吹 知家
252 芳野川桜山吹こきませて春の錦をあらふ岩浪 定範
253 よし野川岩行浪もうつろひぬみてをわたらむ山吹の花 範宗
254 明日よりは春のかたみを橘の小嶋にちれる山吹の花 信実
255 山吹の花のさかりは過にけりゐての蛙は鳴てうらみよ 行能
256 やまふきのうつろふ花やしけからん浪を染たるゐての河水 幸清
257 衣手に井手の川浪かくれともしゐて折つる山吹の花 覚寛
258 吉野川桜に暮る春の色のはしやすらふ岸の山吹 隆昭
259 春の行河への浪にぬれくも今日こそおらめ山吹の花 経乘

260 行水は下く、るとも山吹の花をもよすないてのしからみ 家長

261 山吹の花さきしより芳野川岩浪はやく春暮行 光経

262 芳野川春ゆく水のはやき瀬にをのれうつろふ岸の山吹 孝継

263 吉野川落くる水に今そしる人にしられぬ山吹のはな 秀能

264 ささかゝる下行水の面影に川浪おもき岸の山ふき 俊禪

。夏

社卯花

265 住よしやゆふしてなひく松風に浦なみしろくかゝる卯花

266 みかけ山卯花月夜露なからほすやちはやのふるの神かき 公経

267 手向さすたか世の花の朽もせて神の卯月の色にさくらん 実氏

268 御幣とる三輪のはうりや植をきし木綿四手白くかける卯花 定家

269 神祭る卯月の花やさきぬらん下草かくる杜の木綿して 雅経

270 白妙に神の垣ねはさきにけり卯花月夜くもりあらずな 家衡

271 神垣にさくや卯花あめにますとよをか姫の手向なるらし 家隆

272 卯木垣白木綿かけて御手洗や花のみ申は神やうくらん 保季

273 たか荒和白木綿かけて神垣の御手洗川にさける卯花 知家

274 神世よりひかりやかけて卯花の花もあまてる月よみのもり 定範

275 夏くれは三室の山の榊はに木綿四手かけてさける卯花 範宗

276 川の瀬にたてぬ社も卯花のしのに衣をほすかとそみる 信実

277 あまつ袖ふるの山なる賢木葉に雪の白木綿かくる卯花 行能

278 夏神樂けふやしつらん卯花の白木綿かくる賀茂の川なみり 幸清

279 磯の神くさひにける瑞籬に猶卯花のかくる白木綿 覚寛

280 ささあへぬ花よりしめをゆふかつら卯月をかけて神も待けり 隆昭

281 卯花や玉垣しろくさきぬらんはるかにかくるかもの川なみ 経乘

282 稲荷山杉の下陰したはれて卯花月夜みちもさやけし 家長

283 神山の青葉ましりにさきにける初卯花の色そさき 光経

284 卯花の白木綿かくる此比は手向にける初卯花の色そさき 孝継

285 木綿四手にまかふ卯花うちなひき神の井垣としるくもある哉 秀能

286 手向をくたか木綿四ての色とてか神垣しろくさける卯花 俊禪

早苗多

287 急雨に取て隙なき早苗かな昨日もけふも袖ぬらしつ、

288 けふ幾日千里の田子の取もあへすまきし早苗の程ぞ知れぬ 公経

289 天の下田子のもすそやしほらんいつくも同早苗取ころ 実氏

290 植暮すみとりの早苗里ことに民の草葉の数もみえけり 定家

291 植つくす千里の田子の暇なみつけの小櫛も早苗取比 雅経

292 打はへてとれとも尽す引しめの外まであまる早苗なるらん 家衡

293 ゆくつるの鳥羽田の早苗里つ、き千世の数とる御代の民哉 家隆

294 ますらをか千町の早苗とりく、にけふは五月とこゑ急く也 保季

295 遠山田道ある御世に立民の其数しらすとる早苗かな 知家

296 君か世は千町の早苗ひきつれており立田子の数もしられす 定範

297 立ならふ民の小笠も数そひてけふも千町に早苗取也 範宗

298 待えつ、あまねき年の五月雨に荒田の澤もさなへとる也 信実

299 玉鉾や道ある民も数そひて山田の早苗とらぬ日そなき 行能

300 里つ、り幾田の面にうつりきて数そふ民のさなへとるらん 幸清

301 さとことに田子の数そふ君か世に猶とりあまる早苗成けり 覚寛

302 取暮す早苗は明日も山しろの鳥羽に逢へき田子の秋かな 隆昭

303 千里までとれとせぬ早苗よりかねて末葉の秋はみえつ、 俊乘

304 天の下ひろき田の面に立民も取や早苗のやむ時もなし 家長

305 今日幾日田子のもすそのぬれながら千町のさなへ取暮らん 光経

306 天の下しけき恵や御田よりも急きもあへぬ今日の早苗に 孝継

307 早苗とりをり立田子のこゑく、に御代さかへ行程そしらる、 秀能

308 里わかぬ四方のさなへの数く、に君の恵の色やみゆらん 俊禪

里郭公

309 色深くたれも忍の里の名を山ほと、きすなくく、そとふ

- 310 今も又涙やさそふ時鳥わか衣手の里になくなり 公経
311 此里に今も鳴なん郭公き、しに似たるこそふるこゑ 実氏
312 時鳥たれ忍ふとか大あらしのふりにし里を今もとふらん 定家
313 尋きて里間人も鳴ふるす山時鳥我のみそきく 雅経
314 此里の軒はにきなく時鳥猶へたてたる五月雨の雲 家衡
315 白妙の衣ほすより時鳥なくや卯月の玉川のさと 家隆
316 かりにきて伏見の暮の急雨にぬれて里とふ時鳥かな 保季
317 なにか忍ふをのか五月も時鳥飛鳥の里の夕くれのこゑ 知家
318 時鳥いつ御芳野、里なれてたのむの雁の跡忍ふらん 定範
319 ほと、きすをきみの里は過ぬ也いかなる人の夢むすふらむ 範宗
320 菅原や伏見の里の時鳥夜半にやきつる暁のこゑ 信実
321 高円のあれたるさとの時鳥鳴夕暮をたれか忍はん 行能
322 たか里へ思ひ立らん時鳥秋みし色にふりふりて、そ鳴 幸清
323 鳴すて、急きな過そほと、きすなかるの里の名をも憑ん 覚寛
324 里わかすなけや雲路の時鳥空行月の跡を尋て 隆昭
325 やすくやは伏見の里の時鳥人つてならぬ初音待ころ 経乘
326 深草の里をは枯ぬほと、きすなかなく方とたれ恨らん 家長
327 春秋もしらぬときはの里人に夏をきかするほと、きす哉 光経
328 在明の月をもまたし時鳥なか鳴里の急雨のそら 孝継
329 今はとて待れし物を郭公外山のさとにこゑのふりぬる 秀能
330 あけぬとや岡への里の時鳥松よりにしの月に鳴なり 俊禅
- 岡郭公
- 331 時鳥なくや岡への松のはのかはらてあかぬ世、のふるこゑ
332 時鳥やすらふ月の入る方に猶こゑのこる岡の松かせ 公経
333 草むすふ岡のやかたの時鳥ぬれにし袖そ心してなけ 実氏
334 またしらぬ岡へのやとの時鳥よその初音にき、かなやまん 定家
335 朝戸あけの軒はの岡の時鳥をのかね山もいまやいつらん 雅経
- 336 五月まつ山ほと、きす人しれすこゑをならしの岡に鳴なり 家衡
337 あふちさく岡へにきなく時鳥藤のゆかりの色や問らん 家隆
338 檜柴の名にほふ岡の時鳥古郷人も今やきくらむ 保季
339 時鳥たかすむやとにとひなれてゆき、の岡のやすらひのこゑ 知家
340 き、つとはしられてきかむ時鳥初音ならしの岡の忍音 定範
341 時鳥いつもわきけり夕月夜さすや岡への松に鳴こゑ 範宗
342 ほと、きす夜半の名残は飛鳥川ゆき、の岡に又も尋ん 信実
343 心なき人やはとまる時鳥なくや五月の岡の松かけ 行能
344 時鳥鳴捨て行かた岡の松にかたふく有明の月 幸清
345 待人をなとかたらははて時鳥独忍ひの岡になくらん 覚寛
346 夕日さすむかひの岡の時鳥雲のはたてに折はへてなけ 隆昭
347 時鳥たれを忍ひの岡のへの夜深き雨にぬれて鳴らん 経乘
348 ほと、きすなくや岡への松のはのいつともわかぬこゑの色かな 家長
349 水くきの岡への里の時鳥ねての朝けにきかぬ日はなし 光経
350 玉鉾のゆき、の岡の郭公いま一こゑに暮す比かな 孝継
351 片岡の杉の木かくれ風過てこゑほのかなる時鳥かな 秀能
352 時鳥なくや五月をいつとてか猶も忍ひの岡の一こゑ 俊禅
- 夜廬橋
- 353 うた、ねの枕みしかき夏の夜に夢も昔とにほふ橋
354 ふしわひて昔なかもむる古郷のまやのあまりに匂ふたち花 公経
355 風かほる花橋にやとりして月も昔の色やそふらん 実氏
356 橋の花ちる里の夕月夜空にしらぬ影やのこらん 定家
357 さためなく夢も昔とむは玉のやみのうつ、に匂ふたち花 雅経
358 橋の花ちるよひの急雨にむかしをかけてぬる、袖かな 家衡
359 月やあらぬ昔やたれと匂ふらん花橋ももの身にして 家隆
360 今夜しも袖のかしるし橋の小嶋のとまり浦風やふく 保季
361 かたいとをよるの袂も匂けり花橋をたまにぬきつ、 知家

- 362 たれかしの独忍ふの軒はなる花たち花の夜半のね覚を 定範
 363 軒ちかき花橋のほふ夜はむかし忍ふの袖そ露けき 範宗
 364 影やとす月もむかしのよそならず花橋のほふ袂に 信実
 365 なかめつ、ねぬ夜の袖やかよふらん花橋も露そこほる、 行能
 366 忘すは花橋にしたねして跡はむかしの夢とたにとへ 幸清
 367 橋のほひそのこるさ夜衣かさねし袖は昔ならねと 覚寛
 368 見もはてぬ夢のいつくに橋の遠き昔のかをさそふらん 隆昭
 369 橋のほふ軒もる月影にむかしの袖の色もみえけり 経乗
 370 月影にむかし忘ぬ面影のけに橋は袖の香そする 家長
 371 夏の夜もや、深行は橋のした吹風の袖にす、しき 光経
 372 古やたかみしか夜の名残より袖のかたみに匂ふたち花 孝継
 373 深き夜を問人もかな岡のへのおとろか軒にほふたち花 秀能
 374 五月やみめに見ぬ人の袖のかをほひにさそふ軒の橋 俊禪
 籬瞿麦
 375 古郷の庭もまかきもをく露のわきて色こきとこ夏の花
 376 わか宿の籬にうへし撫子の花もま遠に問人のなき 公経
 377 雨そ、くおなし籬の草ながら露をもけなる撫子の花 実氏
 378 撫子のたのむ籬もたわむまで夜の間の露のぬける白玉 定家
 379 をく露ややとりなるへき夕暮の籬はやかて山となてしこ 雅経
 380 たれゆへに籬の露のをきるつ、ぬれてかはかぬ床夏の花 家衡
 381 朝露のまかきの姿うつたへに見れともあかぬ撫子の花 家隆
 382 白露の玉に錦を敷嶋や籬をかさる山となてしこ 保季
 383 花の色によるはこえしとやとりして暮る籬を山となてしこ 知家
 384 しけりあふ草もへたてぬ庭の面の籬あらはす常夏の花 定範
 385 朝日影露さへにほふ撫子の花のまかきを誰にみせまし 範宗
 386 あたにゆふ籬のうちを床夏のをのれふしてや露にぬるらん 信実
 387 常夏のまかきもしつむ古郷の草にやつれぬ花の色く 行能
- 388 古郷のまかきは山となてしこの花にのこれる夕暮の空 幸清
 389 昔みしものと籬はかはらねと露そうつろふ床夏の花 覚寛
 390 うすくこき籬にうへし撫子の色を忘ぬ花のあさ露 隆昭
 391 うつしうへし籬あれ行床夏の花はむかしの露そうつろふ 経乗
 392 日をへつ、まかきにあまる匂哉さきそふからの撫子の花 家長
 393 蚤なかぬ夕もあはれなりまかきにさける山となてしこ 光経
 394 秋や今はちかきまかきの朝ほらけ露のをきける床夏の花 孝継
 395 植をさし山となてしこ尋てはふるき籬の程はしらる、 秀能
 396 秋をまつ草の籬にをく露のうつろひそむる常夏の花 俊禪
 江蛩
 397 白露の玉江の蘆のよひく、に秋風ちかくゆく蛩かな
 398 難波えや蘆の葉かくれすむ物を小屋もあらはにとふ蛩哉 公経
 399 夏虫のをのれはやみにあらねともまよふ入江は月もやとらす 実氏
 400 漕帰るたな、しを舟同江にもえて蛩のしるへかほなる 定家
 401 難波めかすくもたく火の深き江にうへにもえても行蛩哉 雅経
 402 なにはえやあまのいさりか蛩かも蘆のほかに秋風そ吹 家衡
 403 伊勢の海の入江の草の塩千方海士も蛩の玉はひろはし 家隆
 404 行蛩玉江の蘆の浦風にかりそめならぬ秋をつくらん 保季
 405 難波えやみるめはあまのいさり火の影ほのかにも行蛩哉 知家
 406 なにはえやからぬ蘆火をたきそめて浪のよるをもしる蛩かな 定範
 407 暮行は蛩とひかふみしまえの玉江のまこもしはしからすな 範宗
 408 難波かたもゆる蛩も同江に煙そあらぬあまのいさり火 信実
 409 難波えの蘆間の蛩もえてのみこやあらはなる思ひなるらん 行能
 410 夏と秋とたれかはわきてみつのえにかたへす、しく行蛩哉 幸清
 411 つらき江にみたれそめにし夏虫の玉散斗物思ふらん 覚寛
 412 はり江こく御舟ふりにし浪の上に猶玉敷はほたる成けり 隆昭
 413 難波えやさのみはともす海士もあらし蛩やけふる漁火の影 経乗

- 414 かゝりさす棚なし小舟漕かへり入えの螢数そそひゆく 家長
415 大井川くたす鶴舟のかゝり火に入江の螢数まさらん 光経
416 深き江の思ひよいか夏虫のとへと白玉あはれとや見ん 孝継
417 身よりあまる思ひは誰も難波なる深き江にしも飛螢哉 秀能
418 暮やらぬ蘆の葉かくれ飛螢入江の水や夜をいそくらん 俊禪
。秋
- 早秋
419 今よりの夕露ふかき秋の色にしらぬ昔をしる涙かな
420 いつまてとむれぬし鳥も今更に立ことやすき秋の初かせ 公経
421 草の葉に今朝をく露の色みれば風より先に秋はきにけり 実氏
422 天川わたせの浪に風たちてや、ほとちかき鶴のはし 定家
423 空蟬（空蟬）の羽にをく露もあらはれてうすき袂に秋風そ立 雅経
424 秋きぬと風はさやかに音信て色こそみえね野への草葉に 家衡
425 岡へなる早田の穂むけ打なひき昨日の早苗秋風ぞ吹 家隆
426 衣手の涼しきまでもなけれども思ひなざる、夕暮の空 保季
427 秋やくる色はつれなきときはきの青葉の山に風かはる也 知家
428 夏は、や稲葉の鳴子ひきかへて昨日の早苗秋風そふく 定範
429 いつしかと身にしむ斗龍田姫秋吹かせに人や恋しき 範宗
430 さひしさのあはれをしらぬ宿もなし四方の木草の秋の初かせ 信実
431 風（風）の音もいつかはるらん秋はきてまたあさちふのを、しのはら 行能
432 大方はたか秋ならぬ萩のはに忍ふもつらき風の音かな 幸清
433 宿かるかまたひとへなる衣てにひかりもうすき秋の三日月 覚寛
434 思ふたに露そとまらぬ今よりの草の戸さしの秋の夕かせ 隆昭
435 今朝みれば時雨ぬ先の乙羽山色かはり行秋かせそ吹 経乘
436 露落る早田の軒はうちなひき今朝よりまほに秋風そふく 家長
437 いつもきく庭の松風吹かへて衣てさむき秋はきにけり 光経
438 今よりの朝けの袖も心をよ暮る夜かはる秋の初かせ 孝継
- 439 夏衣をく白露の明方にしられぬほと秋かせそふく 秀能
440 深みとりつれなき松に吹風もうつる斗の秋はきにけり 俊禪
- 萩露
441 をく露の色に出行秋はきや物思ふ草の袂なるらん
442 萩か花散てふ事をまたきよりの袖のなはらす秋の白露 公経
443 ならひかはうつれはかはる袖の上にかこちかほなる萩のしら露 実氏
444 わきてよもあま飛雁のをきもせし宿から深き萩の朝つゆ 定家
445 年をへてうつろふ秋の露やそふいつかは袖のもとあらの萩 雅経
446 色ことに萩の上葉にをく露やめにみる秋のあはれなるらん 家衡
447 さきかくす野守か庵のさゝの戸もあらはにをける萩の朝露 家隆
448 萩の上の露にはなにと斗になれてうつろふよひの月影 保季
449 小萩原下葉のこらす色に出て露もうつろふ秋風そふく 知家
450 露をもき枝にもさよや深ぬらん小萩かうれに月かたふきぬ 定範
451 風わたる萩の下葉にうつる露それも此比色かはりつ、 範宗
452 萩の上の露をかさねて鳴雁の涙にうかふ秋の色かな 信実
453 遠山田雁そ鳴なる秋はきの下葉の露や色にいつらん 行能
454 秋萩の葉末にをもき夕露に色をかへても吹嵐かな 幸清
455 物思はぬ宿もかなしや萩かえに雁の涙の露おつるころ 覚寛
456 秋にあひて物思ふ宿の萩の露かならす雁の涙ともなし 隆昭
457 此ほとはなにの涙の露かをく雁もまたこぬやとの萩はら 経乘
458 野風たつ萩の錦のぬきをうすみ結と、めぬ露のしら玉 家長
459 鳴わたる雁の涙とをく露といつれかそむる野への萩はら 光経
460 ぬきとめぬ萩の白露袖ふれて物思ふ秋の涙にそかる 孝継
461 秋の野にむすほ、れたる萩か枝の露より先に袖はぬれにき 秀能
462 秋はきの花ちるのへの白露は染ぬ袂も色そうつろふ 俊禪
- 萩風
463 萩原や末こす比の夕暮にめに見ぬ風も秋そかなしき

- 464 恨ても秋まで人の問こかし風のやとりの庭の萩はら 公経
- 465 さひしさのことはり許吹風もわか身にとまる宿の萩原 実氏
- 466 今よりの夕暮かこつ下萩をうちつけに吹く秋の初かせ 定家
- 467 大方のなひく草木はわかねとも萩の上葉そ秋風は吹 雅経
- 468 下萩に露の白玉くたくなり我身ひとつの秋の夕かせ 家衡
- 469 草も木もさそな嵐の山かせにひとりしほれぬ萩の音哉 家隆
- 470 萩の葉にはじめてかはる秋風を空に待ける手枕の露 保季
- 471 秋の色をそれともわかぬ夕暮も心やすめぬ萩の上風 知家
- 472 あれはありと見し人なから萩のはのかはらてそよく秋風も哉^{かな} 定範
- 473 萩の葉に夏は忍し風の音もはけしくなれば秋の夕暮 範宗
- 474 おきはらや末野、露に風たちて身にしむ時の秋の夕くれ 信実
- 475 秋をうしとなかめぬ宿の萩のはに夕暮ならぬ風や吹らん 行能
- 476 枯くゝに秋の心なるまでもいかなる色のおきの上風 幸清
- 477 大方の秋のあはれのなかにしも夕暮ちきる萩のうはかせ 覚寛
- 478 萩のはをよきて吹行かせならは袖のよそなる露やこほれん 隆昭
- 479 心から籬の萩をうへそめて秋風ことにぬる、そてかな 経乗
- 480 ねやちかくうへしはたれそ萩のはの末こす風も人のとか、は 家長
- 481 うへ捨てきく人もなき古郷の籬にのこる萩の上かせ 光経
- 482 住捨しあはれ幾世の古郷に風はむかしの庭の萩はら 孝継
- 483 ね覚する庭の萩原うちそよき人も恨めし山おろしのかせ 秀能
- 484 さらにぬたに袖ほしかぬる古郷の月に夜深き萩の上風 俊禪
- 尋虫声
- 485 松虫のこゑにや宿をかり衣すそ野の秋に道もまとはて
- 486 き、つやとそなくさめの言のはもたれに問ましのへの松虫 公経
- 487 秋の野に袖はにほへと松虫のをのかありかは風もをしへす 実氏
- 488 松虫の鳴方遠くさく花の色くおしき露やこほれん 定家
- 489 までしはしき、ても問ん草の原風にまかふ松虫のこゑ 雅経
- 490 夕されはをのれ鳴てそ松虫の草葉の露のやとりをはとふ 家衡
- 491 分わひぬもすの草くきそことたにをしへぬ野への松虫のこゑ 家隆
- 492 問わひている野夜深き刈萱のしたねに誰を松虫のこゑ 保季
- 493 秋の野の草葉の露にしほれきてこの夕暮も松虫の声 知家
- 494 うつし植し花の跡とふ虫の音も野へになとめそ秋の夕かせ 定範
- 495 夕暮に吹くる風よしるへせよいつれの野へに松虫のこゑ 範宗
- 496 誰をとふ道のゆくても松虫のこゑをしるへの蓬生のやと 信実
- 497 草の原虫の音しけき宿とへは一むら薄秋かせそふく 行能
- 498 夕暮はしの、は草の跡かたもみえぬ道とふ松虫のこゑ 幸清
- 499 をかやはら露こほるとも松虫のこゑをはよそにき、や過へき 覚寛
- 500 誰ためかまつ名を虫の音にたて、尋ぬよその露に鳴らん 隆昭
- 501 鳴虫のこゑやいつことたとるまに草むらことの露にぬれつ、 経乗
- 502 いつくにかわれ松虫は恨らんまよふ野原にさ夜深にけり 家長
- 503 松虫のこゑする野へを尋ぬとて草村ことに袖ぬらしつ、 光経
- 504 ふみ分し野中ふる道跡はあれと虫の音たとる秋の夕暮 孝継
- 505 中くゝにわけてもつらし浅第^{茅敷}原虫の音よはる野への秋かせ 秀能
- 506 幾帰りわけぬ草葉もなかりつる其方の露に松虫のなく 俊禪
- 山家月
- 507 山里は軒はの峯のたかければ松の葉なから月ぞ深行
- 508 溪深き松の梢を草葉にて庭よりいつる山のはの月 公経
- 509 住かふる宿から色やまさるらん都にもみし山のはの月 実氏
- 510 月ならてたれ柚山の陰はかり深き柴屋の秋を問まし 定家
- 511 袖の上にとさすとても此山の峯にはちかき月そなれぬる 雅経
- 512 住なれぬ宿ゆへかはるあはれ哉軒は見つる山のはの月 家衡
- 513 松の戸をおし明方の山風に雲もか、らぬ月をみる哉 家隆
- 514 軒深く杉もる月の葉をしけみ幾たひ同袖にきゆらん 保季
- 515 さひしさは問につらさを真柴しく外山の庵の床の月影 知家

- 516 いとひこし雲をは谷に住なしてうき世をいつる峯の月かけ 定範
517 なかむれは数さへちかく飛雁の軒はにかゝる山のはの月 範宗
518 さらしなやをは捨山の柴の戸にしはしも秋の月はくもらす 信実
519 秋やあらぬ月やみし世にまさるらん住こし山の庵そうかる、 行能
520 世をいとふ心のおくの山里に独そ月をみても過ぬる 幸清
521 のかききてまたあくかる、山さとに住なれにける月のかげ哉 覚寛
522 山深く問人さそへ夜半の月花のあるしを春はかこちき 隆昭
523 問れまし月も梢の外そ行槇の葉しけき秋の山里 経乘
524 山里に今はり心月のみやかはらぬ秋のともとみるへき 家長
525 をのつから風もとまらぬさゝの庵深山もさやに月はもりけり 光経
526 ならはては深山の友と憑こし住うかりける月のひかりを 孝繼
527 くもるへき木葉吹しく山里の風より後に月は出けり 秀能
528 結をきし真柴の庵やあれぬらん露なからる山のはの月 俊禪
- 野径月
529 あたし野や夕の露のたま／＼もぬきとめかたき草の上の月
530 なかめ行月にうらなきくすのはの帰るもしらぬ野への秋かせ 公経
531 雪にすむ高ねの月やさそふらんふしのすそ野、秋の旅人 実氏
532 武蔵野は露をくほと遠ければ月を衣にきぬ人そなき 定家
533 なかめつ、深行末も忘れぬ山のは遠き野への月かけ 雅経
534 やすらひに空行月もやとりけり露分わふる野地のみ、原 家衡
535 とまるへきすゝのまるやは荒にけり里までをくれ野への月かけ 家隆
536 すみのほる月をは月とをきながら木の下晴ぬ宮城野の露 保季
537 武蔵野は行末ちかく成にけり今夜そみつる山のはの月 知家
538 やとるへきすその、露を置ながら猶山のはにかゝる月かけ 定範
539 分暮る野はらの露のしら玉をあかすもみかく月の影哉 範宗
540 春日野は秋行道も白妙の袖ふりはへて月をみるかな 信実
541 行とまるりなき秋のおもひかなすみのみまさる野への月影 行能
- 542 はる／＼とかき分る草の葉末よりにはかにいつるむさしの原 幸清
543 月影のをくらん程は猶わけむ生の、露は末とをくとも 覚寛
544 時雨つる生野、末は晴にけり遠かた人の袖の月かけ 隆昭
545 思ふ事それとはなしの月そすむさゝ、分る野の露の衣手 経乘
546 月に行ふしのすそ野そいそかる、清見か関のみをの浦まで 家長
547 むさし野や行旅人の跡もなし月の光の秋のしら雪 光経
548 いなみ野は分行露の深ければ浅茅かすゑに月そかたよる 孝繼
549 分暮す野原の露も白妙の衣手さむき夜半の月かけ 秀能
550 はる／＼と行野、すゑの草葉まで露を限にやとる月かけ 俊禪
- 船中月
551 泊舟ね覚にのこる月影をむかしの夢になく／＼そみる
552 月にこく奥津舟人浪まより数さへみゆる住よしの松 公経
553 わたの原遠き船出に行暮て道もやとりも月になれぬる 実氏
554 知さりき秋の塩路を漕舟はいか斗なる月をみるとも 定家
555 漕舟の外行浪も月さえて雲はへたてはやへのしほかせ 雅経
556 わたの原いさよふ浪に舟出してまほにも月をなかめつる哉 家衡
557 木の間なきもろこし舟のうきねにも心つくしの月はみえけり 家隆
558 又やこむひれふる山を漕舟なれたよりもしらぬ月に任て 保季
559 月影のあかぬひかりをみなれ棹さすやしづくに袖もぬれつ、 知家
560 みもきくもならはぬ夜半のね覚哉逢もる月に磯の松かせ 定範
561 あたら夜の月をしづくにさす棹のゆくても惜きうちの河長 範宗
562 夜舟こくしるへの風に雲消て跡なき浪は月そさやけき 信実
563 奥津浪あら磯しろく夜は深てうきねの袖によする月影 行能
564 秋の夜は八十嶋分るあま小舟人にもつけぬ月やみるらん 幸清
565 今そしる夜半に棹さすあまを舟月みむとのしわさ成とは 覚寛
566 をのつから月みる友と成にけりちきらぬ海士の奥の釣舟 隆昭
567 をのれさへうきたる舟にやとりきてよな／＼浪にぬる、月影 経乘

- 568 ゆらのとを夜わたる月にさそはれて行ゑもしらすいつる舟人 家長
- 569 湊いりの蘆分小舟こき出て難波の奥の月をみる哉 光経
- 570 わたつ海や秋なき浪を漕舟も浦路の月に袖はぬれけり 孝継
- 571 涙のみうきつの浪のなみ枕月にひたせる袖そかなしき 秀能
- 572 海人小舟よるへの浪にこす棹のすゑより伝ふ袖の月かけ 俊禪
- 暁鹿
- 573 契契をく深山の秋の暁に猶うき物と鹿はなくなり
- 574 をのか妻もつれなくみゆる限とや有明の山に棹鹿のこゑ 公経
- 575 夕月夜暁やみのむら雲にみなりた時雨て鹿も鳴なり 実氏
- 576 永夜にあかすや月をしたふらん峯行鹿の有明のこゑ 定家
- 577 明るまてつま待風も高砂のをのれつれなき棹鹿のこゑ 雅経
- 578 立帰る思ひやつきぬ棹鹿のこゑのかきりはあか月そなく 家衡
- 579 在明の月の桂のもみちはを峯に残して小鹿鳴なり 家隆
- 580 鹿よいかにすその、妻を惜むとも入る山しらぬ明方のこゑ 保季
- 581 明くれの小倉の山の秋風にね覚やすらん棹鹿の声 知家
- 582 棹鹿のつま恋かねてぬる夜半も猶暁をうしと鳴なり 定範
- 583 此比の暁露にいかはかりつまとふ鹿のぬれてなくらん 範宗
- 584 あり明のつれなき山に鳴鹿も猶うき物と妻をこふらん 信実
- 585 秋の夜はね覚の後も長月の有明の月に鹿は鳴ける 行能
- 586 住わふる世をうち山の朝ほらけ猶おもひ入るしかそ鳴なる 幸清
- 587 暁をうき物そとは棹鹿もいつならひてかこゑにたつらん 覚寛
- 588 をのか妻鳴てや鹿のわかるらんうつるふ萩の暁の露 隆昭
- 589 こひ妻にあはて明ぬとなく鹿の惜むもしらす月そかたふく 経乗
- 590 棹鹿も小野、草ふしをき別帰るならひのこゑも惜す 家長
- 591 夕月夜暁やみのくらふ山木の下たとり鹿やなくらん 光経
- 592 妻をなみなくや小鹿の涙よりち、にくたくる暁の露 孝継
- 593 枝折する暁をきの袖のうへに鹿の音ならぬ露やをくらん 秀能
- 594 棹鹿のなくや涙をかけそへて暁深き山のした露 俊禪
- 河霧
- 595 橋姫のまつ夜の月やいたつらに霧立こむるうちの河浪
- 596 秋深き川瀬の霧の晴やらて人こそみえね事はかよへと 公経
- 597 大井川ふかきみせきに立霧も昔の世、の秋や恋らし 実氏
- 598 飛鳥河淵瀬もしらぬ秋のきりなに、深めて人へたつらん 定家
- 599 つれもなき楨の小山は陰絶て霧にあらそふうちの川浪 雅経
- 600 秋風や龍田の川の霧のうちに色こそみえね水く、る也 家衡
- 601 河霧に宇治の橋姫朝な／＼うきてや空に物おもふ比 家隆
- 602 飛鳥の古郷こめてあすか川と瀬も晴ぬ霧のあけほの 保季
- 603 紅葉はの時雨、色はなかりけり霧のみ深き秋の川浪 知家
- 604 朝日山霧は夜深く立こめてひとり明行うちの川なみ 定範
- 605 夕されは遠方舟やまよふらん霧に成行さほの河浪 範宗
- 606 芳野川岩浪こめて立霧もはやくそ秋の深くみえ行 信実
- 607 遠方や明行霧の絶問よりたか袖したふうちのはし姫 行能
- 608 吉野川岩浪こめて立霧のはやくなかる、山風そ吹 幸清
- 609 明ぬとて遠方人や出ぬらん川瀬の霧はまた夜深きに 覚寛
- 610 阿武隈に立川霧の朝な／＼しるてもやらぬ人な隔そ 隆昭
- 611 嵐山麓の河の夕霧によそのもみちの色そ消行 経乗
- 612 さし帰る宇治の川長きりのうちにた、こ、もとの友よはふ也 家長
- 613 最上川霧のした行いな舟のほるもみえぬ秋の夕暮 光経
- 614 なかれても深き契の思ひ川あたにへたつる瀬、の朝霧 孝継
- 615 ほの／＼と遠方人のこゑながら風になかる、宇治の川きり 秀能
- 616 麓よりたつ河霧をはらひかね風も空なる秋の山のは 俊禪
- 擣衣幽
- 617 今夜たれ其方の風のたよりとてぬしきたまらぬ衣打らん
- 618 まとろめはそれかあらぬか秋風の吹くる方に衣うつなり 公経

- 619 聞まよふこゑさへ消るうす霧の遠き山へに衣打なり 実氏
620 秋風にさそはれ消て打衣をよはぬ里のほとそきこゆる 定家
621 から衣うつか砧もはつ雁の雲をわたるねにまかひつ、雅経
622 衣うつ音もおほるに霧こめて深行月のさむき空かな 家衡
623 夜やさむき里は雲居の木枯にこゑさへうすく衣打也 家隆
624 へたて行雲に嵐の遠方やたれ里遠く衣うつらん 保季
625 里とをくけふは生野の花す、きほのかに秋の衣うつなり 知家
626 さとや遠き絶間は消て秋風の吹につけてそ衣打なる 定範
627 たかりの有明の月の明方にこゑもほのかに衣うつらん 範宗
628 衣打其方のつてもたえくををとつれかぬる里の秋かせ 信実
629 幾里の人にあはれをしらすらむ衣うつ夜の庭の松風 行能
630 ちか、らぬよその砧も音つれぬ人のしつまる秋のよなく 幸清
631 絶く／＼に砧の音そよはるなる其方の風や吹かはるらん 覚寛
632 風かよふ枕の底にをとつれて方もさためす衣打なり 隆昭
633 遠里や其方の月にたれかすむあるかなきかに衣打こゑ 経乘
634 里の海士の塩やき衣うつ音もまとをにひ、く風のとつて哉 家長
635 秋の夜のななきね覚の月影に遠き砧の音そさひしき 光経
636 しつのめか月におきみの里遠み追風しるく衣打なり 孝継
637 衣うつ里やいつくと分かぬる外山の末に月もか、りぬ 秀能
638 深はて、猶たかりのと許もきこえぬ程にうつ衣かな 俊禪
- 夕紅葉
- 639 しから木の外山のみちをのれとや夕日を染る色まさるらん
640 おほかたの夕日の影もあかねさす八しほの岡の秋のみちは 公経
641 染わたす木葉のうへの露も猶夕はわきて秋やみゆらん 実氏
642 龍田姫雲のはたてにかけてをる秋の錦はぬきもさためす 定家
643 暮か、る夕つけ鳥の折はへてにしき龍田の秋の山のは 雅経
644 秋もいまはゆふくれなるのみちはや野にも山にもものこる色なる 家衡
- 645 とく暮る小倉の山の陰もなし秋のみちの下照すころ 家隆
646 夕つくひ下照山のうすもみち時雨も露も染ぬ色かな 保季
647 紅葉する秋のは山の夕つくひうつるふ雲の猶時雨らん 知家
648 夕つくひ染のこしたる山陰の木葉斗や時雨待らむ 定範
649 時雨つる梢は晴て夕つくひ錦ほすてふあまのかく山 範宗
650 けふも又暮なはなけの道ならて紅葉を分る山の奥かな 信実
651 待となき人も恨めし山里に木葉のおつる秋の夕くれ 行能
652 夕時雨ふりて、色や染つらんから紅の峯のみみちは 幸清
653 時雨のみ染さりけりな夕つくひうつるふ山の木、のくれなる 覚寛
654 くもるとも紅葉はのこせ山のはに月待空の四方の木からし 隆昭
655 夕つくひうつるふ峯のうすもみちいま一入は時雨せねとも 経乘
656 ゆふ時雨ふるからをの、もとかしはもとはなから紅葉しにけり 家長
657 小倉山夕日かくれや時雨つるぬる、かほなる秋のみちは 光経
658 行秋や今は手向の山風に夕暮かけて散もみちかな 孝継
659 山風にかけもたまらす夕つくひ森の木葉のうつるひしより 秀能
660 小倉山雲より西にめくる日の名残あらはす峯の紅葉は 俊禪
- 残菊句
- 661 色に出てしはしはにほへ菊の花これより後の秋もすくなし
662 朝な／＼うつるふ色にならふとも香をたにのこせ霜の白菊 公経
663 暮て行秋の手向に色かへてふた、ひ匂ふきくのしら露 実氏
664 置初て幾世つもれるにほひともいさ白菊の花の下つゆ 定家
665 物こと／＼にうつるふ比の色なから秋もかきらす匂ふしら露 雅経
666 こと／＼にほひやかはるはつ霜にうつるひのこるしら菊の花 家衡
667 竹の園まかきの菊のほふ袖千世もかさねよ露のまに／＼ 家隆
668 秋深み籬の菊はしほれてもうつるふ色にかやはのこらぬ 保季
669 今朝はまたうつるふ色も白菊の花は老せぬ秋の霜かな 知家
670 霜枯はうつるひなから白菊の二たひ花のさかりをそみる 定範

- 671 草も木もうつろひはつる秋風にひとりしほれぬ庭のしらすく 範宗
 672 今はとて霜に枯行白菊の色こそあらねかやはうつろふ 信実
 673 問人の袖に匂ひをと、めてもうつろひのこれ秋の白菊 行能
 674 白菊のうつろふ花はむらさきの草のゆかりの色とこそみれ 幸清
 675 それかとも匂ひ斗そ残ける色は跡なき菊のまかきに 覚寛
 676 色はみなうつろふ菊の垣ねよりもとの匂ひの秋風そ吹 隆昭
 677 うつろひて霜のみ今は白菊のほひもさむく秋かせそふく 経乗
 678 植しよりねこして枯ぬしら菊の深き匂ひは長月の末 家長
 679 打はらひ折袖さむくにほひけり霜のまかきにのこる白菊 光経
 680 霜ふかき垣ねの菊のこ紫たかもとゆひに匂ふなるらん 孝継
 681 菊の花にほひもうすき初霜にうつろひのこる色そかなしき 秀能
 682 あしひきの山路の菊の白露にぬれてほしけむ袖のかそする 俊禪
 。冬
- 朝時雨
 683 小倉山時雨もかほくこゑのうへに今朝あらはる、峯の木枯
 684 もみち、る山は朝日の色なから時雨てくたるうちの川浪 公経
 685 嵐吹はらの外山のあさかしはぬるや時雨の色に出つ、 実氏
 686 秋過て猶恨めしき朝ほらけ空行雲もうち時雨つ、 定家
 687 朝なくしほる、袖もますか、みみる影さへに時雨てそゆく 雅経
 688 此里の朝けの煙晴やらて峯の時雨の雲つ、く也 家衡
 689 春日野に朝ある雲も山風に時雨てわたる冬はきにけり 家隆
 690 ほのくくと明る朝戸の時雨より冬はきにけり深山への里 保季
 691 冬きぬと今朝は岩田の柞原音にたて、もふる時雨哉 知家
 692 夜の間に山はのいつくをめぐりつ、今朝は軒はに時雨きぬらん 定範
 693 朝なく時雨の音そよはり行真木の板屋にもみちふく比 範宗
 694 冬きぬといふ許にや神な月今朝は時雨のふりまさりつ、 信実
 695 初時雨古郷さむく冬はきてかはらぬ松もけさそさひしき 行能
- 696 その色とみえはこそあらめ時雨ふるときはの山の今朝の村雲 幸清
 697 神な月おもひもあへぬ朝戸いてに真屋の軒はのうち時雨らん 覚寛
 698 むら時雨あさ日も定なき物をなに山人の衣ほすらむ 隆昭
 699 山めぐり夜のまの秋を送てや名残時雨、今朝のむら雲 経乗
 700 初時雨くもりもはてぬ朝つくひむかひの岡にみかくしら玉 家長
 701 神な月時雨て明る山のはにはなれもやらぬよこ雲の空 光経
 702 神な月峯に朝日はさしなから夕を急くむら時雨かな 孝継
 703 かきくらす木葉の色も晴行は今朝はまはらにふる時雨哉 秀能
 704 まさ木ちる外山の嶺の朝くもりなに、時雨の色を染らん 俊禪
- 竹霜
 705 秋をきし露ものこらぬ呉竹の葉わけの霜の色そつれなき
 706 置まよひかさなる霜に音つれはわか世も深ぬ窓の呉竹 公経
 707 契をけは葉かへぬ色にさ、竹のおほ宮人の袖のあさ霜 実氏
 708 いつ世まてなれてふりぬる河竹のまた下陰に霜そをきそふ 定家
 709 竹の葉によなく霜の古郷は庭もまかきも冬そあれ行 雅経
 710 をく霜の世、をかさねて竹の園かはらぬ色に年やふりなん 家衡
 711 山鳥のすゑをの里もふしわひぬ竹の葉したり永夜の霜 家隆
 712 霜のをく籬の竹の下みとりやつれぬ色を木枯そふく 保季
 713 冬の日はやかて程なく呉竹の葉にをく霜の消あへぬまで 知家
 714 露は霜にむすひかへたる呉竹のはにしたかひて風もわく也 定範
 715 幾千世も枯ぬためしをみよとてやみとりの竹に霜はをくらん 範宗
 716 木にもあらぬ籬の竹は冬草の霜につれなき色かとぞみる 信実
 717 竹の葉のさやく霜夜におとろけはさえたる月はかたふきにける 行能
 718 あられふる音こそよはれ竹のはにや、をく霜の深きよの空 幸清
 719 ひとりふす窓の呉竹風さえて葉分の霜もをきまよひけり 覚寛
 720 竹の葉にをく夕霜のをのれのみ嵐にもろき色は見えつ、 隆昭
 721 呉竹のかはらぬ色にをきなれてあたる霜も千世はへぬへし 経乗

- 722 木にもあらず草にもあらずぬ呉竹は霜はをけとも色はかはらす 家長
- 723 永夜のね覚の窓の竹の葉に暁さむく霜やをくらん 光経
- 724 此比の夕霜しろき竹のはいつるもまたぬ窓の月影 孝継
- 725 霜こほり衣ていたくさゆる夜に竹のはしるく明るしのめ 秀能
- 726 ふりつまむ雪の末葉のいかならん霜たにをもき園の呉竹 俊禪
- 池水鳥
- 727 住わひて池の蘆まを立鳥の氷にのこる跡もはかなし
- 728 池さむき蘆まにこほる水鳥の青羽のこさぬ冬の夜の霜 公経
- 729 いけ水によわたる鳥もなれぬらんおなしやとかる有明の月 実氏
- 730 にほ鳥のしたのかよひも絶ぬらむのこる浪なき池の氷に 定家
- 731 ゆられ行鳩のうき草もよるへなみ氷らぬ程そひる澤のいけ 雅経
- 732 池水にうきなからこそ年をふれ惜からぬ世をおしと鳴つ、 家衡
- 733 この池の木葉にあそふ蘆鳥の青羽こきませ吹風哉 家隆
- 734 夜や寒さうきぬの池のうす氷ひとへ斗のをしの毛衣 保季
- 735 こやの池のつら、の床のさゆる夜を明しかねたる鴛のひとりね 知家
- 736 月さゆるこやの蘆間にすむをしのをのれはらはぬ霜の村さえ 定範
- 737 池水の玉藻の床にすむ鳥のうは毛の霜に冬はきはきにけり 範宗
- 738 みるめかる便にあらぬ池水をかつきわひぬる鴛のひとりね 信実
- 739 中新に霜夜の空やさむからん氷に帰る池のをし鳥 行能
- 740 見るもうしつかはぬ鴛のひとりのみいたつらにたつ跡の池水 幸清
- 741 池水にわれとむすはぬつら、ゆへみなれし鳥の遠さかりぬる 覚寛
- 742 にほのすむ池の氷に降雪のうへにもかよふ跡はありける 隆昭
- 743 冬の池のつら、の床の独ねはかなしき物とをしそ鳴なる 経乘
- 744 池にすむ鴛のうきねもなけれぬ袖の氷に思ひあはせて 家長
- 745 冬の池の水草をしなみ降雪にをのれもしろき鴨の村とり 光経
- 746 影絶て氷はてたる池水にたくひもみえぬ鴛のひとりね 孝継
- 747 さゆる夜の氷ふみ分池水に身を鴛鳥のすむかひも哉 秀能
- 748 蘆鴨の往来もいまはやすからず絶くこほる冬の池水 俊禪
- 鳴千鳥
- 749 わたの原漕出し舟の友千鳥八十鳴かくれこゑきこゆなり
- 750 風よする奥のこ嶋の浜千鳥浪のをりぬにこゑくたく也 公経
- 751 伊勢嶋や玉しく浦の塩千方後しのへとも鳴千とり哉 実氏
- 752 浜ひさしなけのかたみか友ちとりとわたり捨る奥のこ嶋に 定家
- 753 淡路嶋わたる千鳥も白妙の浪間にかさす奥つしほかせ 雅経
- 754 浦つたひ塩くむあまの袖ぬれてを嶋の千鳥月に鳴也 家衡
- 755 聞なれぬ新島守かあま衣さゆる霜夜に鳴千とり哉 家隆
- 756 鳴千とりこゑの夜深く成ま、に月かたふきぬ松か浦嶋 保季
- 757 友ちとり鳴音許を川嶋の水の白浪たちわかれつ、 知家
- 758 淡路嶋夕塩さきや立ぬらん須磨のむかひに千鳥鳴也 定範
- 759 さ夜千鳥浦のはつ嶋行かへりあり明の月の空に鳴也 範宗
- 760 むしの音は野嶋の草に枯はて、をのか霜夜の千鳥鳴也 信実
- 761 さ夜千とりなくや其方の浪まよりみゆるこ嶋に月そか、れる 行能
- 762 ありときく浦のはつ嶋ほのくと降をける霜に千鳥鳴也 幸清
- 763 松嶋や磯こす浪に立千鳥ぬれてや夜半に浦伝ふらん 覚寛
- 764 さ夜千鳥こゑをしまの篷屋形なれたる海士の夢はつれなし 隆昭
- 765 明石方嶋立かくす朝霧に舟こそみえぬ千鳥なく也 経乘
- 766 あさりする海士や家路に帰らんを嶋の千鳥こゑさなく也 家長
- 767 さ、嶋の磯こす浪に立千鳥心とぬれてなかぬ夜そなき 光経
- 768 をちこちの塩風さむみも、つての八十の嶋に千鳥鳴也 孝継
- 769 嶋かくれ浪うつ磯にある千とりくたけてこゑは夜半そかなしき 秀能
- 770 行舟もさそな明石の嶋かくれをのれあらはに鳴千とり哉 俊禪
- 松雪
- 771 山のはにのこるみとりは見えねとも音あらはなる松の雪おれ
- 772 もろともに老その松そ色かはる今年も深くつもるしら雪 公経

- 773 我（新抄）やとは今朝ふる雪にうつもれて松たに風の音信もせず 実氏
 774 したたへす梢おれふす夜な〜に松こそうつめ嶺のしら雪 定家
 775 庭の面は薄をしなみ跡絶て問こぬ人を松のしら雪 雅経
 776 跡たえて日数ふりつむ里なれやむなく人を松の白雪 家衡
 777 高砂の尾上の鹿のなかぬ日もつもりはてぬる松のしら雪 家隆
 778 たかさこの尾上に風の音はしてしつ枝もみえぬ松の白雪 保季
 779 問れぬを心の松もいたつらにうつもればつる山のしら雪 知家
 780 音信し庭の松さへうつもれて雪には風の跡も絶けり 定範
 781 染まさむ春の一入松のはのみとりも見えず雪そふりしく 範宗
 782 高砂の尾上の松も埋木の朽もやすらん雪のしたおれ 信実
 783 跡絶て問に音なき雪の中も嵐を告る庭のまつかな 行能
 784 をとこ山松はかひこそなかりけれふるきみゆきの跡の曙 幸清
 785 降つもある雪を花とや峯の松をのか嵐にはらははさるらん 覚寛
 786 さひしさははらふ嵐のこゑもあれと猶奥山の松の雪おれ 隆昭
 787 谷深みありともしらぬ松か枝も雪おれしるき冬の明ほの 経乗
 788 深からぬ松の下さへ道そなきたへぬしつ枝に雪をもる比 家長
 789 しからきの外山はうすき白雪のうつみもはてぬ松の村立 光経
 790 問人は思絶にし山里に昨日もけふも松のしら雪 孝継
 791 染かねし今朝はときはの名もつらし雪吹はらへ峯の松かせ 秀能
 792 しら雪のみな降うつむ山のはに風をたよりの松の一むら 俊禅
 湖雪
 793 にほの海や氷に雪の積るより奥にのこれる浪の上の月
 794 しかの浦の氷のうへに立浪も猶音絶る雪のあけほの 公経
 795 志賀の浦やさ、浪遠く行舟の屋形もしるくふれる白雪 実氏
 796 にほの海や汀の外の草木まてみるめなきさの雪の月影 定家
 797 楽浪や浦路はるかに風さえて峯もたひらの山の白雪 雅経
 798 志賀の浦よるともみえぬ楽波やひらの高ねの雪の曙 家衡

- 799 たつかうへによこさる浪やさ、浪の比良山風のさそふ白雪 家隆
 800 もみち、る梢につもる白雪を浪にこきおろすひらの山かせ 保季
 801 降雪（新抄）は其ともみえず楽浪のよせてかへらぬ奥津嶋山 知家
 802 しかの浦やこほる汀の跡もなし音こそたてね雪の白雪 定範
 803 霜枯のあしりの浦をこき行は雪の花ふく奥津嶋かせ 範宗
 804 白妙の雪をかさねてさゆる夜に氷そ高きしかのうら浪 信実
 805 さ、浪や山にしめゆふ人はなし釣するあまや雪にやらん 行能
 806 音たつるしかの浦風吹さえてかへらぬ浪や雪の夕暮 早清
 807 しかのうらやあまさる雪の曙にこほりはとけぬ楽浪そよる 行能（ママ）
（マ）
（コ）
（ノ）
（行）
（能）
（実）
（開）
（水）
 808 にほの海や浪まにしろき奥津嶋さすかに雪の色そまきれぬ 隆昭
 809 志賀の浦や絶〜つもある白雪にしたの氷のほとそ見えゆく 経乗
 810 しかの浦や遠さかり行雪の色にむすふ氷の程せしらる、 家長
 811 志賀のあまの釣する袖やさむからし雪に成行ひらの山かせ 光経
 812 しかの浦や浪まもしろく降雪に其ともわかぬ海士の袖哉 孝継
 813 さゆる夜の雪吹送る山風に明方しろきしかのからさき 秀能
 814 氷行しかの浦わの程みえてさ、浪遠くつもるしら雪 俊禅
 惜歳暮
 815 （新抄）と、めはやなかれてはやき年浪のよとまぬ水はしからみもなし
 816 （新抄）思へともかひなき水のわたし守送りむかふる年の暮かな 公経
 817 月は猶在明の山のかけもみきつれなく過るとしの暮哉 実氏
 818 思ひやれさすかにもの、と許も恨ぬへふしにつもる年〜 定家
 819 年きはる身の行ゑこそかなしけれあらはあふ世の春をやは待 雅経
 820 夜半の空あけはこえなむいたつらに行年浪の関守もかな 家衡
 821 （新抄）つらかりし袖の別のそれならておしむをいそぐ年の暮哉 家隆
 822 あはれ又五十の冬もくれは鳥あやまたぬ身の老をかこては 保季
 823 行年の暮るを人の急くらんたれもわか身につらき別を 知家

- 824 としつもる雪の暮こそかなしけれいかなる人の春を待らん 定範
825 帰る山雪ふりつもるかひやなき暮行年の道もまとはて 範宗
826 身にとまるならひもつらき暮ことに惜むは年をいとふ成けり 信実
827 ふりまさる我身に霜をかさねても暮行としを鴛の独ね 行能
828 いつまでとしらぬ命も暮て行としをかそへておとろかれぬる 幸清
829 年暮てむかふる春はよそなれと身の老らくそうきをさらはぬ 覚寛
830 こし方の夢をはかなみかそふれはいやまさりにも惜き年哉 隆昭
831 春秋の別したにも惜れきなへてことしの夕暮の空 経乗
832 いかにもせむあすより春のたつか弓引と、めたるならひなければ 家長
833 うつり行月日そ惜き飛鳥のあすかもあらは年や暮なん 光経
834 惜めともつれなく帰る年浪のと、めかたきにぬる、袖かな 孝継
835 飛鳥川かはる淵瀬もある物をせく方しらぬ年の暮哉 秀能
836 身のならひ今行すゑもたのまねはつもらん年の惜きけふ哉 俊禪
。恋
- 寄雲恋
- 837 忘るなよ夕の雲の跡もなく空に成ぬる人のおもかけ
838 たのみけむ其方の風そさためなき人の心の空のうき雲 公経
839 しられしな思ふあたりに行雲のうき身をかへて消わたるとも 実氏
840 伊駒山いさむる峯にゐる雲のうきて思ひは消る日もなし 定家
841 思ふより涙ふりそふあま雲のよそにも人はみえぬ物から 雅経
842 よそにして色し見えねは思ふともまた白雲のうはの空哉 家衡
843 契しは夢になかむるうき雲の消て跡なきうつ、成けり 家隆
844 思ふ方の雲に時雨よおのつからつれなき袖も色やかはると 保季
845 あけぬとて山立わかれ行雲のよそふるからにつらき空かな 知家
846 よそにみるかつらき山の雲たにもたかねの松にか、りやはせぬ 定範
847 恋わひて身はうき雲と消ぬともあたのためしや世、に残らん 範宗
848 夕暮はよそにやこひん天津空雲のはたての行末しらねは 信実
- 849 夕暮の空にはかなく行雲の跡なき道に思ひたつらん 行能
850 わか恋は風吹空にまかふ雲の思ひさためぬ夕暮そうき 幸清
851 夕暮は思ふ心をかけてしれ其方の空の雲のはたてに 覚寛
852 空になる人の心のたくひまてわかある山の雲そつれなき 隆昭
853 人しれす思ふ其方に時雨ても我袖つけよ空のうき雲 経乗
854 忘すようき雲かくれすむ月のほかにみえし人のおも影 家長
855 もろともにかよふ心やへたつらんいもせの山の中のうき雲 光経
856 憑めとや夕の峯をなかわれはわかれて帰るをちのしら雲 孝継
857 風吹はかつらき山の嶺の雲跡なき恋に思ひきえつ、 秀能
858 みとりなる山のはわたる白雲のよそめもしるくぬる、袖哉 俊禪
- 寄露恋
- 859 君かすむあたりの草にやとしてもみせはや袖にあまる白露
860 吹風にたか言の葉を刈萱のみたれてか、る露も恨めし 公経
861 思ひくたく千草に色やうつらん身よりあまれる秋の白露 実氏
862 道野へのあたなる露を置とめてゆくてにけたぬ恋そかなしき 定家
863 おくといひぬことは忍はん白露のねたくや袖の色にいつらん 雅経
864 我恋は秋の草葉の露しけみしはしも君をかけぬ日はなし 家衡
865 秋も猶野原の露のをかぬ夜はあれとも袖のぬれぬ日はなし 家隆
866 花にこそ待る、露のをき所めつらしからぬ袖のうへかな 保季
867 あた人の心の秋の露よりそみし言の葉も色かはりける 知家
868 よひの間の事しけき露の袖なからやとしてけりな有明の月 定範
869 秋風にをき所なき白露の我身ふり行ことのはそなき 範宗
870 我袖のなみたの色におもなれて草葉にあさき秋の露哉 信実
871 山深み秋の木葉にをく露のむなしき色に袖や朽なん 行能
872 思ひいれぬ風にも色はある物をなにと岩田の林の下露 幸清
873 身にしれは四方の草木もあはれなり物を思はて露はをくかは 覚寛
874 よそにのみ菊の白露幾世しもつもらぬ袖の測となるらん 隆昭

- 875 朝夕のよその草葉の露までも袖のならひにあはれとそみる 経乗
 876 わか袖は松のうはゝにあらねともつもりて露の海となるまで 家長
 877 別にし其暁の名残よりかならず露は袖にをきけり 光経
 878 いたつらにゆきてはきぬるよひのまは我のみはらふ袖のしら露 孝継
 879 いかにして人の心を秋のゝの露わけ衣うらみそめけん 秀能
 880 木葉ちる秋の山へにをく露の下にうつろふ色もうらめし 俊禪
 寄煙恋
 881 ふしのねや絶ぬ煙の行多たにしらぬ思ひの年やへぬらん
 882 富士のねの空にや今はまかへまし我身にけたぬむなし煙を 公経
 883 みるめなき浦より遠に立煙我をはよそになにこかるらん 実氏
 884 如何せむあまの藻塩火絶す立けふりにははる浦風もなし 定家
 885 恨みしり難波のみつに立煙心からやくあまのもしほ火 雅経
 886 人しれぬ恋を塩屋の煙哉心のそこをあまやくむらん 家衡
 887 尋はや煙をなにゝまかふらん忍ふの浦のあまの藻塩火 家隆
 888 なひけとや絶ぬもしほの煙をもめたてぬ方へさそふ浦かせ 保季
 889 恨ても我身の方にやく塩の思ひはしるく立けふりかな 知家
 890 中／＼に今は浅まの夕煙空に思ひをしらせてし哉 定範
 891 さひしさに柴折くふる山里も身より思ひの煙やは立 範宗
 892 ふしの山嶺に煙のあらはれはいかにせむとか思ひそむらん 信実
 893 行多なき空に思ひのみちぬれはふしの煙は麓成けり 行能
 894 忘れしと契しことは瓦屋のしたにやむせふ煙なるらむ 幸清
 895 須磨の海士のやく塩煙尋てもなひくならひをいかて知まし 覚寛
 896 藻塩くむ磯屋の煙あはれなとなひかぬ方に身をこかすらん 隆昭
 897 よそへても見せむと思ひし不尽のねの煙をうつむ雲もうらめし 経乗
 898 浅間野や立名もよその夕煙をちこち人も今やとかめん 家長
 899 するかなる富士のしは山しはしたに消ぬ思ひにたつけふり哉 光経
 900 立まよふあまの藻塩の夕煙思ふそなたのうら風もかな 孝継
 901 富士のねのもゆる思ひにくらふれは煙はよその物とやはみる 秀能
 902 身にあまる思よ空にくらへ見よふしの煙も外にやはたつ 俊禪
 寄草恋
 903 浅茅生の小野のしの原露なからたか秋風にみたれそめけん
 904 つき草にうつろはんとや染をさし人の心も色かはり行 公経
 905 我袖の露の下荻とにかくに思ひみたれて秋かせそふく 実氏
 906 すゑまでとたれか契し秋の霜むかしかたりの庭の下草 定家
 907 いかにせむ人の心の種たえておもひ忘るゝ草のははなし 雅経
 908 いたつらに枯やはてなむ草の原如何に契を霜そむすへる 家衡
 909 うは玉のねての夕の思草こよひもむねにもえや明さん 家隆
 910 ひるまなきゆふかけ草の白露のしられすけなむ身こそ惜けれ 保季
 911 歎わひたのむ夢路の忘草ねられぬまゝにしける比かな 知家
 912 忘るゝも忍ふも人の軒はなる草に思ひの種はまきけり 定範
 913 いかにせむ忍ふのおくの思草我のみしりて年は経にけり 範宗
 914 忘草しければ宿はうき人の心のたねも露やをくらん 信実
 915 わするなといひし斗の庭のおもに幾度草のおいかはるらむ 行能
 916 吹風の音にはたてし白露の身はかけ草の下にをくとも 幸清
 917 花すゝき草の袂に露そへて秋のさかりもくるしかりけり 覚寛
 918 枯にけりそれをかきりにあさ霜のをきて別し道の芝草 隆昭
 919 冬草の枯てはやまぬ春みれば猶たのまるゝ人心かな 経乗
 920 思草枯なてたれか道野への尾花か下に種をまきけん 家長
 921 わか恋は軒の忍ふのうす紅葉絶ぬなみたや古郷のあき 光経
 922 なをさりの契りあさかの沼水におふてふ草の枯のみそ行 孝継
 923 人心浅茅色つく折しもあれ夕日かくれに猶たのめけん 秀能
 924 をく霜の下に朽そふ冬草のかりの契もいつ絶にけむ 俊禪
 寄鳥恋
 925 鶯のこはれる涙むすほゝれとけぬ思ひをしる人そなき

- 926 枯はてし契りの末の春霞たてるやいつくもすの草くき 公経
927 鳥の音をむなしき袖にかこちてもあはれ幾夜の有明の空 実氏
928 逢坂の往来にたつる鳥のねの鳴くおしき暁そうき 定家
929 袖の上も数かく許成にけり鳴の羽音のしけき泪に 雅経
930 蘆鴨のうきは忘て一すちにみなれんまてを思ひこそやれ 家衡
931 なき名のみゆふつけ鳥の逢坂に捨られてたに音をも鳴はや 家隆
932 思ひあれは独色こき衣手の森には雁のなみたなくらん 保季
933 いかにせむゆふつけ鳥のおのつから鳴音をいとふ暁もかな 知家
934 塩のみつ袖しの浦のかたをなみ蘆へのたつの音をのみそなく 定範
935 忘らるゝ身を鶯のよなくに臥もさためぬやとの呉竹 範宗
936 枯ねとや龍田の梢色かへてゆふつけ鳥も時雨てそ鳴 信実
937 待夜のみむなしき空に飛鳥のよそにも人の遠さかるらん 行能
938 夕暮はあま飛鳥の行かたも思ひしらるゝ身の契かな 幸清
939 歎つゝあかしかねたる永夜の鳥の音いとふあか月も哉 覚寛
940 帰覧たか暁の鳥の音にうきもよそなるあり明の空 隆昭
941 今もなくゆふつけ鳥よあはれ又たか逢坂の往来みるらん 経乘
942 みるまゝに人の心のかりのこをいくつかさねて如何にたのまん 家長
943 尋みる野へのかよひ路跡もなしたか偽の鳴のくさくき 光経
944 雲かくれなき行鳥のよそなからありとはきけといかゝたのまん 孝継
945 今はとて思絶たる鳥の音のつらきや人の情なるへき 秀能
946 つきもせぬ鳴の羽かき幾帰り暁ことにものおもふらん 俊禅
- 寄枕恋
- 947 あちきなく契の程もしられつゝふるき枕のたれしたふらん
948 なにと又枕の塵をはらふらんならひなき身のりやの秋かせ 公経
949 いかてわか心を人の枕にて思ふ許の行ゑしらせむ 実氏
950 思ひいつる契のほともみしか夜の春の枕に夢はさめにき 定家
951 しられしな我袖斗しきたへの枕たにせぬ夜半のうたゝね 雅経
- 952 物思ふ日数は塵のつもれとも夜半の枕のする方そなき 家衡
953 しろたへの枕も今もくれなぬの千人や泪そめて朽なん 家隆
954 待わひて枕さためぬうたゝねもかりそめなから幾夜つもりぬ 保季
955 とこはあれ枕に苔も結をきし露の契やあたに朽なん 知家
956 しれはこそ夢にも人を見せつらめつけの枕より教へせよ 定範
957 もろともになれし枕の形見さへ今はあたる夜なくそうき 範宗
958 心からをのれうちねぬ夜をへては枕のうへの夢の関守 信実
959 さ庭に身はならはしの秋の風たか手枕のひまもとむらん 行能
960 かくて世にふるき枕の跡はあれとねやはむなしき人の面影 平清
961 みるめかる方を教よ敷妙の枕のしたにかよふあま 覚寛
962 枕とてねむ方もなし泪川うきて思ひのよるへしらねは 隆昭
963 ありし夜のかたみもつらし菅薦のなゝふにのこるつけの小枕 経乘
964 枕たに人のきかくに語るなよそれをそ今はおもふ事とて 家長
965 敷妙の枕の下にをく露はなきてぬる夜の涙なりけり 光経
966 いかになし夢のならひも絶はてゝよそに成行つけの小枕 孝継
967 いかにしてつけの小枕たのめしを苔深きまで待としらせん 秀能
968 うたゝねの夢てふ物を契にてありし枕にのこる面影 俊禅
- 。雑
- 暁述懐
- 969 契あれは暁深くきく鐘の行すゑかけて夢や悟なん
970 夢覚る身を暁のかねてしれ月より西にかゝるこゝろは 公経
971 有明の月にむかへる住吉のまつ事おほき我身成けり 実氏
972 をのつからまた在明の月をみてすむともなしのうきにたへける 定家
973 限あれはけふも暮ぬとなかめつる昨日のかねの暁のこゑ 雅経
974 鐘のをとにこむ夜の夢もおとろきて思ひしらるゝ明方の空 家衡
975 思ふ事また尽はてぬ永夜のね覚にふくる鐘の音哉 家隆
976 たとりこしおとろのみちもふみ分つ行末照せあり明の月 保季

- 977 思ふより暁深きね覚哉我身にちかき秋の時雨に 知家
- 978 長きねふり覚ぬかうちのうた、ねの一夜の夢そ明るかひなき 定範
- 979 暁はうき身をいと、秋の夜の露をく物と袖やしるらん 範宗
- 980 我かくてこよひもあけの衣てに老のね覚の露そちかつく 信実
- 981 暁のね覚に思ふ身のはてをしる人あらはあはれとや見ん 行能
- 982 あはれにもかならず老のね覚とて暁深き夢そのこれる 幸清
- 983 身のうさを思つ、けぬ暁にをくらん露のほとをしらはや 覚寛
- 984 白露のをきあていのる暁のこる歌の空はさりとも我をしるらん 隆昭
- 985 のとかなる暁まさる身のうさにたへて幾世のはてを知はや 経乗
- 986 おとろかす山のはちかき月影に五十の夢の残をそとふ 家長
- 987 いたつらに我よ深ぬとなかむれば廿日あまりの月そ出ぬる 光経
- 988 有明のつれなくみゆる暁も我身の外にうき物そなき 孝継
- 989 晴くもる有明の月を待えても心の外とたれなかもらん 秀能
- 990 思ふ事忘る、夢のさむしろにいとふもしらぬ鐘の音かな 俊禪
- 閑中燈
- 991 是のみとともなふ影もさ夜深て光そうすき窓の灯
- 992 独のみあり明の月の入るまでに残りあらそふ夜半のともし火 公経
- 993 永夜も独しぬればまどろまてか、けそつくる秋のともし火 実氏
- 994 つくく〜と明行窓の灯のありやとはかり問人もなし 定家
- 995 人とはぬ我よやいたく深ぬらん影よはり行窓のともし火 雅経
- 996 冬の夜のか、けかねたる灯にはなれぬ影の猶ほのかなる 家衡
- 997 消やうてのこる影こそあはれなれ我よ深そふ窓のともし火 家隆
- 998 伝きて窓しつかかなる君か世にひかりをそふる法のともし火 保季
- 999 深き夜の夢の名残はほのかにてのこるともなき秋の灯 知家
- 1000 伝きてのこるともなき灯の窓にほたるをつく人そなき 定範
- 1001 長夜の夢路たえ行窓の中に猶残ける秋のともし火 範宗
- 1002 くらき雨の窓うつ音に人はこて影ほのかなる秋のともし火 信実
- 1003 明ぬるかひかりもうすく成にけりむなしき床の秋のともし火 行能
- 1004 消やらぬ光もしろく明にけり窓にのこれるよひの灯 幸清
- 1005 うきにそふ影より外の友もなししはしな消そ窓のともし火 覚寛
- 1006 身の上を思ふもかなし柴の戸にあるかなきりのよひの灯 隆昭
- 1007 山里は窓よりいつる月影にそむけもあへぬ夜半の灯 経乗
- 1008 永夜をやみは此世もかなしさに独か、くるねやのともし火 家長
- 1009 なにとなく昔恋しきよるの雨におなし形見の窓の灯 光経
- 1010 あはれなる永夜送る灯の消なむとするしの、めの空 孝継
- 1011 里はあれてみしはそれともわきかねぬあらぬか窓にのこる灯 秀能
- 1012 中く〜にさひしき物を楨の戸にありとしもなくのこるともし火 俊禪
- 山旅
- 1013 吹まよふ深山の嵐よさむにてなれにし里の夢も稀なり
- 1014 面影に今をく露そしけり行昔にこゆる宇津の山道 公経
- 1015 さ、のやの袖しく程の陰もなしふるは泪の山のしづくに 実氏
- 1016 わきてなと我しもたへぬ露けさそ山路は誰も旅人そ行 定家
- 1017 立帰り又もやこえん峯の雲跡もさためぬ四方の風に 雅経
- 1018 梓弓はるく〜きぬる旅衣かさなる山は秋かせそふく 家衡
- 1019 千はやふる神垣山もこえぬへし古郷人を思ふあまりに 家隆
- 1020 檜柴の麓の露を分捨てうちむく山も秋風そ吹 保季
- 1021 都出し衣手枯てあさち山色かはり行秋かせそふく 知家
- 1022 明やらぬ雲行嶺に入にけりをくらぬ月の跡の深山路 定範
- 1023 ほとふれは忘やししぬる古郷にさやは契しさやの中山 範宗
- 1024 さてもぬるいはねの嵐身にしめて誰ならはしのさよの中山 信実
- 1025 旅衣かさねぬとこの山風も朝たつ空はあはれなりけり 行能
- 1026 こえわひてなくさむ山の月影もしけき木陰の外までそみる 幸清
- 1027 我のみと思ふ山路の夕暮にさきたつ雲も跡もさためす 覚寛
- 1028 都出て遠山鳥の鳴くもひとりやねなむしらぬ尾上に 隆昭

- 1029 外山には猶のこりけるあはれ哉かさなる峯のおくの夕暮 経乘
 1030 知しらす行あふ暮の旅人はかたへ山路の末そとはる、家長
 1031 足引の山路や遠き旅人の跡よりうつむ峯のしら雲 光経
 1032 古郷の空もたよりの月に又みし面影のさやの中山 孝継
 1033 白雲のかさなる山の苔むしろしきりにぬる、わか袂かな 秀能
 1034 袖に又なれくる月の別さへかさなる山の雲のした道 俊禪
 海旅
 1035 古郷の月は幾夜かめくりあはん浪の教そふとこの浦かせ
 1036 忘なよ一夜なれぬる友舟の出なむ後の跡のうらなみ 公経
 1037 あま衣たみの、嶋にやと、へは夕塩みちてたつそ鳴なる 実氏
 1038 明る夜のゆふつけ鳥に立別浦なみ遠く出る舟人 定家
 1039 影やとす袖はうきねの我からに月そ藻にすむ、しあけのせと 雅経
 1040 打はへてあまのたくなはく人も幾夜なきさに梶枕しつ 家衡
 1041 漕出ぬと人に告へきたよりに八十嶋遠きあまの釣舟 家隆
 1042 西の海夕塩たとる浪まよりこし方遠くいつる月かけ 保季
 1043 明くれの行さきしらぬ浪の上を風に任ていつる舟人 知家
 1044 うきねする一夜の袖をほしかねて思ひしらる、里のあま 定範
 1045 暮か、る深磨の浦路の夕霧に漕行舟そよるへ尋る 範宗
 1046 わたつ海は道のしほりもなき空にた、漕捨る跡の白浪 信実
 1047 松か浦の泊りの磯ときく物を名にもさはらす帰る浪哉 行能
 1048 暮ぬとて泊にか、る夕浪にこと浦しるきあまの漁火 平清
 1049 衣てをしきつの浦のうき枕涙も浪もかけぬまそなき 覚寛
 1050 今年ゆく新嶋守の袖にしれましてならはぬ夜半の浪 隆昭
 1051 くとあくといつかと待し浪の上に都の山はけふそ見え行 経乘
 1052 古郷もちかの浦浪心せよかよふた、ちの夢をのこさて 家長
 1053 旅ねする磯の篷屋に月をみて浪の枕に夢そ絶ぬる 光経
 1054 さたまらぬ風をしるへのあた浪に其日もしらす古郷の空 孝継
 1055 思ひいつる昔の浪に袖ぬれて又折ふする伊勢のはま萩 秀能
 1056 古郷は遠き浦わの涙のみうき出て行あまのつり舟 俊禪
 野旅
 1057 草枕一夜の露を契にて袖にわかる、野への月かけ
 1058 草枕かりねの庵のほのくくと尾花か末に明るしの、め 公経
 1059 旅衣生野、尾花かるしつの手たまもゆらになひく秋かせ 実氏
 1060 野への露うつりにけりな狩衣萩の下葉を分とせしまに 定家
 1061 里遠き野中の庵に人はなし草の袂を枕にそかる 雅経
 1062 都いて、草の枕にむすふ露幾夜かさねて野への初しも 家衡
 1063 霜枯の野寺の鐘の夕月夜たへてもぬへき旅の宿かは 家隆
 1064 しなかととりるなの、をさ、かた敷て玉ちる床に月をみる哉 保季
 1065 旅人の袖の泪に刈萱の露そみたる、野へのあきかせ 知家
 1066 たれか又朝たつ野路の末ならん遠方しろき袖のしの、め 定範
 1067 忘なよ野への庵りのきりくす一夜斗の床になるとも 範宗
 1068 一村の宿の梢に問なれて野中の森にけふはきにけり 信実
 1069 あればつる野中の庵に宿かれは住ける人の跡もはかなし 行能
 1070 見わたせは煙はかりそ立のほる里にちかつく野路の行末 平清
 1071 鳴鹿の泪は袖にかり衣枕なりふる小野、草ふし 覚寛
 1072 武蔵野にやとりはすへし旅衣ひもとく花も露のゆかりそ 隆昭
 1073 なかめやるをちの草葉に立煙野中の庵のしるへかほなる 経乘
 1074 枕とてたのむ冬野、草ながら衣手枯てねむ方そなき 家長
 1075 草枕むすふ野原の里遠み鳥の音きかぬ暁のそら 光経
 1076 忘なと契て出し別路の野原の真葛秋かせそふく 孝継
 1077 しられしな夏野の草の道すからしけき思ひにむすほ、るらん 秀能
 1078 武蔵野やなにのゆかりの露かをくその色しらぬ草の枕に 俊禪
 寄松祝
 1079 龜山のいはねの松を吹風に千世の数そふ瀧のしら玉

- 1080 法の花絶すならひの岡の松ともに千年のかけはかはらし 公経
 1081 種まきし磯へのご松君か世に幾度朽ておいかはりなん 実氏
 1082 大方の松の千とせはふりぬらん人のまことは君かかそへん 定家
 1083 神世よりまもるちかひの尽せねは君か千年も住吉の松 雅経
 1084 君か世は高野、山の峯の松まつも久しき月やみるへき 家衡
 1085 さ、れ石のいは尾とならむ苔の上に松もふりてや君にあひみん 家隆
 1086 ふりにけり幾世かへぬるたけくまの松はたけても末そ久しき 保季
 1087 千世をへて君や三室の岩ね松まつに久しき花の色とは 知家
 1088 さ、れ石の岩ほとなるを松かうへにすむ鶴の子は君そ、たてん 定範
 1089 幾千年契りかをきし君か代にならひの岡の松のむら立 範宗
 1090 住吉の松の千年も陰はあれと君か御かけは猶そ久しき 信実
 1091 君か代をときは山の岩ね松いはねとしけき陰そみえけり 行能
 1092 君か世のかきりそしらぬ高砂の松は二度おいかはるらん 平清
 1093 岡野へにおいそふ松の数くりに千年をゆつる御代そのとけき 覚寛
 1094 契をく松と君との行末をつもらん年のいつれたかけむ 隆昭
 1095 住吉の浜松かえにさく花の幾帰りとも君そかそへむ 経乘
 1096 松陰に萬代すめる法の水むすふにつけてよはひのふ也 家長
 1097 幾千世もときはかきはと契らし竹の園ふく松風のごゑ 光経
 1098 梓弓磯への小松万世の君かためしとたれもひくらし 孝継
 1099 契ある高野、山の峯の松猶行末の千世もかはらし 秀能
 1100 千はやふる神や御垣の松のはに絶ぬ千とせの色を染けん 俊禪

上皇勅書云

五十首和歌事已先例歎其上一何事候哉抑人数加
 一見候畢此中於為家朝臣者雖為重代無下未練
 之由風聞不可然歎雖人数之外家長光経秀能尤可
 詠輩等也家長ハ和歌所預也光経者依堪能已被聽
 昇殿即献中殿和歌者也秀能ハ於当世大略無雙者也
 於有調沙汰者被詠必可被見者也任建久者僧詠定
 有之歎堪能何人候哉不審云々

八月廿二日

五十首和歌加一見之返献之五卷之詠不及用捨皆以神
 妙也就中於隆昭詠者事外物候也凡握翫之余悉加
 愚点畢不顧後見嘲哂愚意所及随歌浅深存点
 長短旁以可令猶豫次第候歎抑定家々隆秀能等之
 詠外大略異様無極候不足言次第候其中如家衡詠
 之中求一首猶以難得可謂未曾有中く定範などは無
 過失候

十月十四日

以上兩通以正本書之

建保六年 御歳廿三 出題 定家卿

御点 上皇 後鳥羽院歎

以豊筑後守 統秋 本書写畢于時

文明十四年五月十日

(山科言因)
権中将 (花押)

「田中」合点表 (空白は合点があることを、「長」は長合点であることを示す)

7	長	174	長	447	長	614		720		884	長	1005	
21		176		461		615		721		885		1008	
23	長	177		463		619		725		894	長	1013	長
24		180		466	長	620	長	726	長	896		1015	長
25		182		467		621	長	733	長	906	長	1019	
26		183	長	469	長	623	長	746		909		1022	
27		187		479	長	637	長	747	長	916	長	1027	長
29	長	197	長	483	長	639		749	長	922		1028	長
39		202		507		645		752	長	923		1030	
43	長	205	長	509		649		762		925		1033	
45	長	213		510	長	652		763		929	長	1034	
48		219		513	長	654		769		931		1035	
51	長	222		514		657		770		933		1037	
55	長	223		522	長	659	長	772		936		1038	
71	長	227	長	525		664		774		940	長	1039	長
89		236		526		674	長	775		947		1041	長
90		243	長	527		684	長	777	長	948		1042	
92		246	長	529		685		791	長	950	長	1044	
93	長	247	長	532	長	686	長	792		953		1048	長
95	長	249		535	長	689		796	長	960	長	1050	
98		259		537	長	692		813		966		1055	長
103	長	263		544	長	698		828	長	969		1057	長
104		351		554	長	699		840	長	973	長	1060	
108	長	378		564	長	700		843		975	長	1061	
109		397		571	長	701		844		978	長	1063	長
133	長	400		576		703	長	852		980		1066	
148		411		577	長	706		858		983	長	1077	長
153		417		593	長	709	長	860		986			
155	長	423	長	595		710		863	長	991			
158		434	長	599	長	711	長	872	長	995			
159	長	441	長	601		712		878	長	997	長		
165		444	長	604	長	717		882		1004	長		

簡校

凡例

- ・「田中」の本文(集付と歌本文の作者を除く)に対する「高松」「穂久」「宮書」「群書」の異同を示した。ただし「群書」の独自異文には明らかな誤りが多いため、他本に異同が見られない箇所は省略に従った。
- ・異同のある箇所につき、上段に「田中」の当該箇所の本文を掲げ、下段に「高松」「穂久」「宮書」「群書」の異文と伝本の略称を挙げた。複数の伝本が同じ異文を有する場合は、この四本中先に現れる伝本の本文を代表させて掲出し、その他の伝本は略称のみ示した。
- ・一部の仮名の異同、漢字と仮名の宛て方、字体の違い、送り仮名の有無、朱墨の違い等の本文解釈上問題にならないと考えた箇所は省略した。異文を挙げる際も同様である。
- ・見せ消ち、見せ消ち傍書及び補入は訂正後の本文を採用し、傍書のみ場合は比較の対象とした。
- ・各本の本文の性格を見極めるのに資するため、明らかな誤読や誤写に基づく異同も取り上げた。

- (歌題目録題) ナシ―光台院五十首 (高松) 光台院殿五十首和歌 (宮書)
- 道助法親王家五十首和歌 (群書)
- 。題―丸印ナシ、下同ジ (高松) (穂久) (宮書) (群書)
- (作者目録) ―末尾ノ勅書ノ後ニ付ス (宮書)
- (作者目録題) 五十首和歌―ナシ (高松) (宮書) (群書)
- 同御点数付之―同御点数 (高松) (穂久) ナシ (宮書) (群書)
- (御詠ノ注記) ナシ―仁和寺御室道助法親王号光台寺後鳥羽院第五皇子 (高松)
- (高松) 仁和寺御室道助法親王号光台寺宮後鳥羽院第五皇子 (穂久)
- 入道二品道助親王 (群書)

- 西園寺入道前太政大臣―西園寺入道前太政大臣号一条相国 (高松) (穂久)
- (公経ノ歌数) 九首―八首 (宮書)
- (実氏ノ歌数) 七首―八首^七 (宮書)
- (雅経ノ歌数) 十九首―十六首^九 (宮書)
- (知家ノ歌数) 二首―三首 (宮書) (群書)
- (行能ノ歌数) 一首―二首 (宮書)
- (法印権大僧都幸清ノ注記) ナシ―善法寺囊祖為顕昭歌門弟 (高松) (穂久)
- 越後法橋俊暹子八幡法師仁隆弟子―ナシ (宮書) (群書)
- (隆昭ノ歌数) 十六首―十四首^六 (宮書)
- (経乗ノ歌数) 五首―四首 (宮書)
- (秀能ノ歌数) 廿八首―廿六首^八 (宮書)
- 俊禪―俊孫、下同ジ (高松) (穂久) (群書)
- (作者ノ位置) ―初春題ハ歌ノ前二置キ、雪中鶯題以降ハ無記名トス (高松) (穂久) (群書) 初春題ハ歌ノ前二置キ、表記ハ作者目録ト同様トシ、雪中鶯題以降ハ歌ノ下二名ノミ記シ、春月題以降ハ多クノ歌人ヲ一字ニ省略ス (宮書)
- 5 あまの岩戸の―あま岩戸の (宮書)
- 8 春さへこゆる―春さえきゆる (宮書)
- 24 うちきえし―うちきらし (高松) うちき、し (宮書) (群書)
- 25 むすほ、れたる―むすほ、れたり (穂久) むすほふれたる (群書)
- 32 雪の古巣に―ゆきのゆるすに (高松) 雪のふるすを (群書)
- 39 はね白妙に―はな白妙に (高松)
- 41 山深み―山ふかき (高松)
- 春も稀なる―はるとまれなる (穂久)
- 44 鶯そなく―鶯のなく (宮書)
- 46 まの、つきはし―ま、のつき橋 (高松) (穂久) (群書)
- 47 たえもせず―たえもせて (高松)

- 56 たてるやいつく―たてるやいつこ (高松) たつるやいつこ (群書)
- 58 跡たにもなし―跡たにもなし (高松)
- 60 契らまし―ちきるらし (宮書)
- 66 霞そわたす―霞そ渡る (宮書) 霞そ渡る (群書)
- 76 嵐にかこつ―山風かこつ (宮書)
- 78 梅の下陰―梅の下かせ (宮書)
- 83 いにしへに―いにしへも (高松)
- 87 やみにこゆれと―やみにこゆると (穂久) やみにもこゆれと (宮書)
- 93 松はみとりの―松のみとりの (宮書)
- 101 雲よりうへの―雲よりうへに (宮書)
- 109 みしかき夜半に―みしかきよはの (高松) (穂久)
- 霞月かけ―霞月哉 (宮書)
- 114 遅くとく―遅くとき (宮書)
- 115 陰こそ同―かせこそおなし (宮書)
- 120 霞なりけれ―霞なりけり (穂久)
- 123 岸の柳や―岸の柳の (宮書)
- 130 陰うつす―かけうすき (高松) (穂久)
- 131 神なみの―かみなひの (高松) (穂久) (宮書) (群書)
- 132 うき草を―うき草は (宮書) (群書)
- 133 岸の白雲―きしの白雲 (高松) 嶺の白雲 (穂久) (宮書) (群書)
- 135 昨日もけふも―きのふのけふも (高松)
- 139 枕急かす―枕 本 かつ (高松)
- 141 しられける―しられけり (穂久)
- 142 春雨も―春雨の (宮書)
- 143 露の枕も―露も枕も (宮書)
- 147 野へのみとりの―のへとみとりの (宮書)
- 色とみえけり―色はみえけり (宮書)
- 148 ふる野のかりいほ―ふるの、かりほ (穂久) ふるのかりいほ (宮書) (群書)
- 149 もえぬらし―もえぬらん (宮書)
- 旅ねの庵に―たひねの床に (宮書)
- 155 別なは―わかれては (宮書)
- 166 をくれぬる―をくれぬる (宮書)
- 173 山のおなたに―山あなたに (宮書)
- 174 雲のかりそ―雲のかりの (高松) (穂久)
- 遠さかるらん―遠さかるらし (宮書)
- 182 花にふり行―花もふりゆく (高松)
- 184 色にうつるふ―色そうつるふ (宮書) (群書)
- 189 人そ稀なる―人そ稀なる (宮書)
- 194 ふるき枝折そ―ふかきしをりそ (高松) (穂久) ふるき枝折 (宮書)
- 196 初さくら花―初さくら哉 (高松) (穂久) (群書)
- 199 花ぞ知ける―花ぞしりぬる (高松) 花ぞちりける (宮書) はなとしりける (群書)
- 205 関の杉村―関の村杉 (宮書)
- 211 御代なれと―御代なれは (宮書)
- 217 それかとそみる―それかともみる (宮書)
- 221 懸たらむ―かけたはむ (宮書)
- 花のしら浪―花のしからみ (宮書) (群書)
- 222 ふまては人を―ふまねは人を (高松) (宮書)
- 231 とふ人もかな―問人もなし (穂久)
- 233 うつろひはてし―うつろひはてし (高松)
- すむへかりけり―すむへかりける (宮書)
- 234 花はさへえぬ―はなはさはらぬ (宮書) 花は へえぬ (群書)
- 239 朝きよめすな―朝きよめする (穂久)
- 247 花はこたへす―花はこたつす (穂久)

- 248 くちなしに―くちなしと(宮書)
 みつともいはし―みつともいは、(高松)(穂久)
- 263 吉野川―芳野山(宮書)
- 264 川浪おもき―河浪惜き(宮書)(群書)
- 268 かける卯花―かくる卯花(宮書) かくる卯花(群書)
- 275 木綿四手かけて―ゆふしてかさし(高松)(穂久)
- 279 瑞籬に―玉かきに(高松)(穂久)(宮書)(群書)
- 281 はるかにかくる―はるかにかへる(高松)(穂久)はるかにかゝる(群書)
- 282 稻荷山―稲手山(宮書)
- 283 さきにける―咲にけり(高松)
- 284 ふるのたまかき―ふるの玉垣(宮書)
- 287 取て隙なき―とる手隙なき(高松)(群書) とりてひまなき(宮書)
- 294 こゑ急く也―うへいそくなり(高松)(穂久) こゑいそくかななりイ(群書)
- 297 けふも千町に―今日も千町と(宮書)
- 298 待えつ、―待えつる(宮書)
- 301 田子の数そふ―民のかすそふ(高松)
- 302 鳥羽に逢へき―とはにたつへき(高松) 鳥羽にまつへき(穂久)
- 303 秋はみえつ、―秋はみえけり(穂久)
- 306 御田やもり―御田やもる(穂久)
- 今日の早苗に―今のさなへに(高松)(穂久)
- (歌題) 里郭公―里(高松)
- 309 色深く―色ふかき(高松)
- なく―そとふ―なく―そおもふ(高松)(穂久)
- 311 今も鳴なん―いまもなきなむ(穂久) いまもなかなん(宮書)
- 312 たれ忍ふとか―たれ忍へとて(宮書)
- 333 心してなけ―こ、ちしてなけ(穂久)
- 338 名にほふ岡の―名におふおかの(高松)(穂久)(宮書) 名にあふをか
- の(群書)
- 344 松にかたふく―おかにかたふく(宮書)
- 345 独忍ひの―ひとり忍ふの(高松)(穂久)
- 346 折はへてなけ―おもはへてなけ(穂久)
- 352 猶も忍ひの―(マ)を忍ひの(宮書)
- 357 さためなく―さたかなる(高松)(穂久)
- 358 花ちるよひの―はなちるよひ(宮書)
- 360 浦風やふく―浦風そふく(宮書)
- 367 かさねし袖は―かさねし袖は(高松)(穂久)
- 376 籬にうへし―籬にうつし(穂久)
- 379 をく露や―をく露の(宮書)
- 394 秋や今は―秋や今(宮書)(群書)
- 395 程はしらる、―程そしらる、(宮書)
- 403 塩千方―塩引かた(穂久)
- 406 たきそめて―焼そめて(穂久)(群書)
- 409 こやあらはなる―こやあらはる、(穂久)
- 410 みつのえに―みつのみに(高松)
- 413 漁火の影―ともし火の影(宮書)
- 416 とへと白玉―と白玉(宮書)
- 423 秋風そ立―秋風そ吹(宮書)(群書)
- 426 涼しきまでも―す、しきま(マ)も(穂久) す、しきま本マては(宮書)
- 428 昨日の早苗―きのふさなへ(高松) きのふさなへ(宮書)
- 430 四方の本草の―四方の木のの(高松)(穂久) 四方の草木の(群書)
- 433 宿かるか―やとりかるか(宮書)
- 434 秋の夕かせ―秋の夕暮(穂久)
- 442 をのれならはす―をのれならはぬ(高松)(穂久)
- 443 萩のしら露―秋のしら露(高松)(穂久)

- 445 露やそふ―露やけふ(穂久)
- 446 をく露や―置露^(マ)(高松)
- 447 さゝの戸も―さゝの戸方も(宮書)
- 450 小萩かうれに―こ萩かこれに(高松) 小萩かくれの^(ウイ)(群書)
- 451 萩の下葉に―萩の下葉も(宮書)
- 色かはりつ、―色かはり行(宮書) 色かはりゆく^(ツ、イ)(群書)
- 477 秋のあはれの―秋はあはれの(穂久)
- 夕暮ちきる―夕暮ちかき(高松)
- 481 籬にのこる―まかきにのこり(高松)
- 490 やとりをはとふ―やとりをそとふ^(ハ)(宮書)
- 494 野へになとめそ―野へになかめそ(高松) (穂久)
- 495 いつれの野へに―いつれの野への(穂久)
- 497 虫の音しけき―むしのしけき(高松)
- 499 き、や過へき―聞え過へき(宮書)
- 500 誰ためか―誰かため(宮書)
- 502 われ松虫は―われ松むしを(高松) (穂久)
- 505 浅^(チ)第^(チ)原―朝茅はら(高松) (穂久) (宮書) (群書)
- 506 なかりつる―なかめつる(穂久)
- 松虫のなく―松虫そなく(宮書)
- (歌題) 山家月―山家月^(チ)とふ人^(チ)もあらし吹^(チ)そふみ山^(チ)へに木葉^(チ)分つる秋のよの月不^(チ)番云々(宮書)
- 511 やとさすととも―やと^(マ)すととも(穂久)
- 512 軒はに見つる―軒はみつる(宮書)
- 514 袖にきゆらん―袖にみゆらむ(高松) (穂久) (宮書)
- 515 間につらさを―とふにつらさの(宮書)
- 517 数さへちかく―数つみちかく(宮書)
- 525 深山もさやに―みやまもさらに(高松)
- 526 ならはては―ならはてそ(宮書) ならはては^(イ)(群書)
- 住うかりける―住うかれける(宮書)
- 530 月にうらなき―月にうへなき(高松)
- 532 月を衣に―月^(マ)ころもに(高松)
- 536 すみのほる―すみ(宮書)
- 544 時雨つる―時雨つ、(宮書)
- 545 それとはなしの―それとはなしに(宮書) それとはなしの^(ヒ)(群書)
- 546 月に行―月そ行(宮書)
- 559 あかぬひかりを―ふかぬひかりを(穂久)
- 560 みもきくも―見もきくも(穂久) 見も聞も(宮書)
- 571 うきつの浪のなみ枕月にひたせる袖そかなしき―うきつの浪にこすさほの末よりつたふそての月かけ(高松) (穂久)
- 585 鹿は鳴ける―鹿ぞ鳴なる(宮書) (群書)
- 587 暁を―あか月は(宮書)
- 棹鹿も―棹鹿の(穂久)
- 589 あはて明ぬと―あはて鳴ぬと(高松) (穂久) (宮書)
- 590 こゑも惜す―声も惜ます(宮書) 声もうらめし^(イ)(群書)
- 592 暁の露―あかつきのこゑ(高松) (穂久)
- 594 かけそへて―うけそへて(穂久)
- 597 秋や恋らし―秋やこふらん(宮書) (群書)
- 612 さし帰る―さしかつる(宮書)
- 613 霧のした行―霧の下こく(宮書) きりの下行^(イ)(群書)
- 624 たれ里遠く―たか里とをく(高松) 誰里とをく(穂久) (群書)
- 625 衣うつなり―衣うつらん(宮書)
- 631 次ノ歌(630)ト逆転(高松) (穂久)
- 630 絶く―に―たえく^(イ)の(宮書)
- 635 音そさひしき―音のさひしき(宮書) 音そさひしき^(イ)(群書)

- 636 追風しるく―^本風しるく(高松) 風しるく(穂久)
- 643 秋の山のは―秋の紅葉は(宮書)
- 644 秋もいまは―秋もいま(宮書)
- 650 のこる色なる―残る色哉(宮書) 残る色なき(群書)
- 650 道ならて―みちなくて(高松) (穂久)
- 652 ふりて、色や―ふりいて、色や(高松) (穂久) (宮書) (群書)
- 655 時雨せねとも―しくれせずとも(宮書)
- 665 匂ふしら露―にほふしらさく(高松) (穂久) (宮書) (群書)
- 673 袖に匂ひを―袖のほひを(宮書)
- 678 深き匂ひは―ふるき匂ひも(宮書)
- 680 たかもとゆひに―たかもとゆひに(宮書) 誰もとゆひの(群書)
- 684 うちの川浪―宇治の川きり(高松) (穂久)
- 685 はらの外山の―はらのみ山の(宮書)
- 687 みる影さへに―みるかけさへも(宮書)
- 690 明る朝戸の―明日あさ戸の(宮書)
- 692 時雨きぬらん―しくれきつらむ(高松) (穂久)
- 693 真木の板屋に―榎木(マ)の(マ)やに(高松) 真木の杉やに(穂久)
- もみちふく比―紅葉ふく也(宮書)
- 700 みかくしら玉―^(マ)かく^(マ)白玉(宮書)
- 707 契をけは葉かへぬ色に―契をけはかへぬ色に(宮書) (群書)
- 708 いつ世まで―いく世まで(宮書)
- 709 冬そあれ行―露そあれ行(高松)
- 717 かたふきにける―かたふきにけり(高松) (穂久) (群書) かたふきにける(り)(宮書)
- 718 や、をく霜の―やとをく霜の(穂久)
- 深きよの空―ふるきよの空(穂久)
- 722 色はかはらす―色そかはらす(ぬ)(宮書) 色そかはらぬ(群書)
- 727 立鳥の―たつ鴨の(宮書) (群書)
- 732 年をふれ―年もふれ(穂久)
- 733 蘆鳥の―あしかもの(高松) (穂久) (宮書) (群書)
- 741 遠さかりぬる―遠さかる声(宮書)
- 742 にほのすむ―にほにすむ(宮書)
- 跡はありける―あととありけり(る)(高松) 跡はありけり(穂久) (宮書) (群書)
- 743 冬の池の―冬の池(宮書)
- 748 蘆鴨の―蘆辺の(宮書)
- 冬の池水―冬の池かな(宮書)
- 752 なけのかたみか―なけのかたみる(穂久) なけのかたみの(群書)
- 756 鳴千とり―^(鳴)鳴ちとり(高松) 鳴ちとり(穂久)
- 760 野嶋の草に―野嶋か草に(宮書)
- 764 篷屋形―いそやかた(宮書)
- 768 も、つての―も、つくの(高松) (穂久) (宮書)
- 八十の嶋に―八十の嶋(本)に(高松) 八十の嶋わに(宮書) (群書)
- 769 夜半そかなしき―よはのかなしき(高松) (穂久)
- 771 松の雪おれ―松のおれ(宮書)
- 772 老その松そ―老その松は(高松) (穂久)
- 773 音信もせず―音信もせぬ(高松)
- 778 尾上に風の―尾上の風の(穂久)
- 783 庭のまつかな―庭の松風(宮書)
- 785 をのか嵐に―をのかあらしを(宮書)
- 786 こゑもあれと―声はあれと(宮書) 音もあれと(群書)
- 788 たへぬしつ枝に―たえぬ雫に(宮書)
- 789 外山はうすき―と山はうすみ(宮書)
- 797 浦路はるかに―うらちわるかに(宮書)

- 801 よせてかへらぬ―よせてかへぬ(マ) (高松)
- 805 山にしめゆふ―やまはしめゆふ (穂久)
- 808 色そまきれぬ―色そまきれる (宮書)
- 819 年きはる―年まきはる (高松)
- 825 道もまとはて―道もまかはす (高松) (穂久) (群書)
- 827 ふりまさる―なりまさる (宮書)
- 834 と、めかたきに―と、めかたみに (宮書) (群書)
- 839 うき身をかへて―うき身を人の (穂久)
- 846 たかねの松に―高ねの松は (高松) (穂久)
- 858 ぬる、袖哉―ぬる袖かな (宮書)
- 859 あまる白露―あまるしたつゆ (高松)
- 863 おくといひぬことは忍はん―をくといひぬとは忍はん (高松) (穂久) (宮書) (群書)
- ねたくや袖の―ねたく袖の (宮書)
- 865 ぬれぬ日はなし―ぬれ(マ)日はなし (宮書) ぬれぬ日そなし (群書)
- 867 色かはりける―色かはりゆく (宮書)
- 872 思ひいれぬ―おもひ入ぬか (宮書)
- 883 浦より遠に―うらよりとをき (高松) (穂久)
- 884 如何せむ―いか、せん (高松) いかにせむ (穂久) (宮書) (群書)
- 888 めたてぬ方へ―たてぬかたへも (高松) (穂久)
- 890 今いは浅あまの―異本注記ナシ (高松) (宮書) (穂久) (群書)
- 894 したにやむせふ―下にやむすふ (宮書)
- 907 草のははなし―草のは、うし (高松) (穂久) 草のはもなし (群書)
- 908 霜そむすへる―霜にむすへる (宮書)
- 915 幾度草の―いくたれ草の (穂久)
- 923 猶たのめけん―猶たのみけん (宮書) 何たのめけん (群書)
- 926 たてるやいつく―たてるやいつこ (穂久) (群書)
- 930 蘆鴨の―蘆辺の (宮書)
- みなれんまてを―見なれぬまてを (穂久)
- 931 捨られてたに―すてられたに (高松) (宮書)
- 音をも鳴はや―音をやなかはや (高松) (穂久) 音をぞ鳴はや (宮書)
- 940 うきもよそなる―うちもよそなる (高松) (穂久)
- 941 ゆふつけ鳥よ―夕つけとりも (高松) (穂久)
- 942 いくつかさねて―いつくかさねて (宮書)
- 947 ふるき枕の―ふる(マ)枕の (宮書)
- 953 しろたへの―敷妙の (高松) しまたへの(マ) (穂久)
- 958 をのれうちねぬ―をのれうきねぬ (宮書)
- 960 ふるき枕の―ふかき枕の (穂久)
- 963 菅薦の―すか庭の (高松) (穂久) 菅むこもの (宮書)
- な、ふにのこる―ならふにのこる (高松) (穂久) (宮書) (群書)
- 964 人のきかくに―傍書ナシ (高松) (穂久) (宮書) (群書)
- 966 夢のならひも―夢のならひの (宮書)
- つけの小枕―露のをまくら (高松)
- 969 夢や悟なん―ゆめやかたらむ (高松) (穂久)
- 970 かねてしれ―かねてしも (宮書) (群書)
- 973 なかめつる―なかめつ、 (宮書)
- 975 ね覚にふくる―ね覚にまくる (高松) (穂久) ね覚につくる (群書)
- 984 をきゐていのこるの―をきゐはのこるのこる (高松) (穂久) 傍書ナシ (宮書) (群書)
- 989 暗くもる―はれくもり (穂久)
- 心の外と―心(マ) ほかと (宮書)
- 1008 やみは此世も―やみも此世も (宮書)
- 1010 あはれなる―あはれなり (宮書) (群書)
- 1012 ありとしもなく―ありとくもなく (宮書)
- 1025 朝たつ空は―朝たつ空も (宮書)

- 1033 ぬるゝわか袂かなーナシ (穂久)
- 1039 影やとすー影やとす (宮書)
- 1040 梶枕しつーかち枕して (高松) (宮書) (群書)
- 1052 夢をのこさてーゆめをのこして (高松) (穂久) (宮書) (群書)
- うき出て行ーこき出てゆく (高松) (穂久)
- 1058 かりねの庵のーかりねの庵の (宮書) かりねの庵の (群書)
- 1061 枕にそかるー枕にそする (宮書)
- 1066 朝たつ野路のー朝たつのへの (宮書)
- 遠方しろきー遠方しろき (宮書) 遠方しろき (群書)
- 1068 野中の森にー野なかのもりの (高松) (穂久)
- 1069 跡もはかなしー異本注記ナシ (高松) (穂久) (群書) 跡もはかなし (宮書)
- 1072 武蔵野にーむさしのや (高松)
- 1073 しるへかほなるーしるへかななる (宮書)
- 1076 別路のー別路に (宮書)
- 1077 むすほゝるらんーむすほゝるとも (宮書) むすほるとも (群書)
- 1079 瀧のしら玉ー瀧の白糸 (宮書)
- 1081 おいかはりなんーおひかはるらん (宮書) (群書)
- 1082 ふりぬらんーふりぬらん (宮書) ぶりぬ共 (群書)
- 1089 契りかをさしー契かけさし (高松) (穂久) かきりかをさし (群書)
- 1092 おいかはるらんーおひかはるとも (宮書) (群書)
- 1093 数くーにーますくーに (高松)
- 1094 いったたかけむーいったたりけん (穂久)
- 1097 契らしー契らん (宮書) (群書)
- 八月二十二日付勅書
- 加一見候畢ー加一見候 (高松) (穂久)
- 中殿和歌ー中殿和歌 (宮書) 中殿会和歌 (群書)
- 譚沙汰ー詠沙汰 (高松) (穂久)

被詠ー彼詠 (宮書) (群書)

被見ー被具 (宮書) (群書)

十月十四日付勅書

(二行目右肩)ー同勅書 (宮書)

加愚点畢ー加愚点畢 (宮書)

存点長短ー被点長短 (宮書)

未曾有中くー未曾有く (宮書)

(以上両通以正本書之ノ) 書之ー書写之 (高松) (穂久)

(以上両通以正本書之ノ後) ナシー以下ノ二文アリ (高松) (穂久)

御詠 道助法親王俗名長仁 仁和寺 御室第五宮号光宣寺 母同頼仁親王内大臣信清女

順徳院 紀号 法親王戊寅年

出題者・加點者ーナシ (宮書)

御歳廿三ー戊寅 御歳廿三 (高松) (穂久)

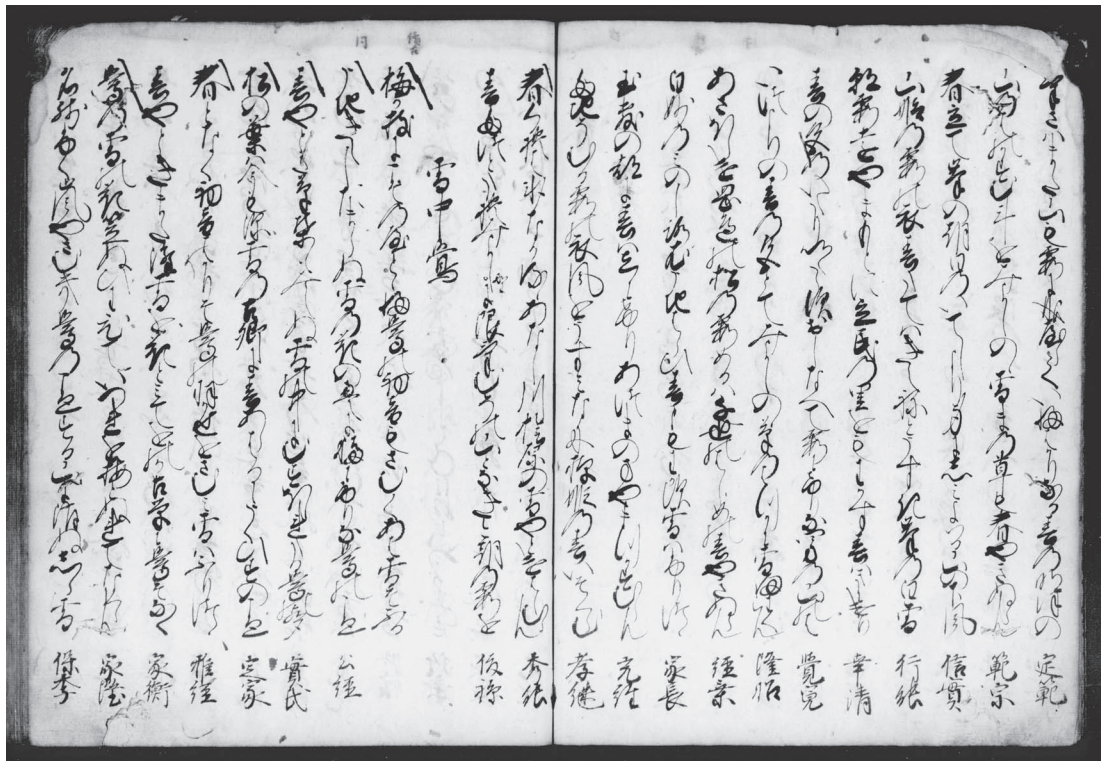
(出題者、加點者ノ後) ナシー「良宗案」ヨリ始マル考証ヲ付ス (高松)

(穂久)

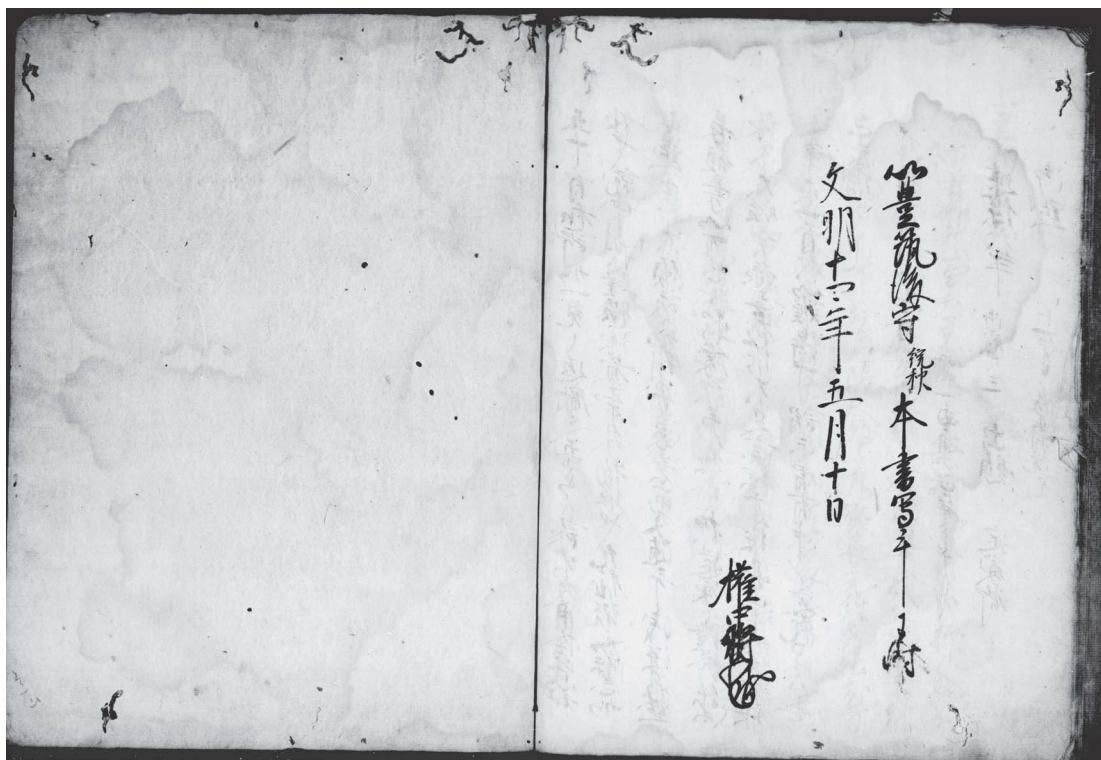
(早稲田大学高等学院非常勤講師・

国立歴史民俗博物館共同研究協力者)

(二〇一九年一〇月七日受付、二〇二〇年四月九日審査終了)



国立歴史民俗博物館蔵田中護氏旧蔵典籍古文書所収「建保五十首」(H-743-117)
第4丁裏・第5丁表。長合点と短合点の区別がある。



国立歴史民俗博物館蔵田中護氏旧蔵典籍古文書所収「建保五十首」(H-743-117)
第57丁裏・裏見返し。奥書部分。